

流れるような紋様が虹色に混ざり合う加鉦石カウンターを眺めて押し黙ること、これこれ地球基準時換算で二時間あまり。どれほど周囲から怪訝な視線を投げかけられようとも『ヒト』の発声器官しか持たないアルトにとつて、ここ『ラウア』語専用カウンターでのやりとりは、まったくもつて不可能だった。

目の前には注文を要求するホロメニューが浮かんだきり。透けたその向こう側には、今にも営業妨害だとまくし立てそうな店員が一体、エラをなびかせて立ち尽くしている。他にこのカウンターの利用者は誰もいない。

もちろん注文のひとつもすませたなら、この気まずさも少しは紛れるのだろうか、見てのとおりメニューはどれも馴染みのない『ラウア』語圏の伝統料理ばかりだ。その得体の知れない流動食に、つかの間でも興味を持つという方がこれまた無茶なハナシだった。

『兄さん、あんた症候群か？』

半ばからかうように、背後から言葉が投げられる。生真面目に反論するほど、まだ冷静さを失ったわけではない。聞き流すべく、アルトはカウンターに投げ出したままのホロレターへ指を伸ばした。すかさず開いたなら、折り目の投光レンズから、文字映像は飛び出してくる。

ハッピーバースデー アルト 獅子の口は真実を語る

その下に円形の俯瞰図は広がり、図の一点を指し示した数列と、添付された光学バーコードが白く光って浮かび上がった。言わずもがな光学バーコードは、ここへの圧縮ナビプログラムであり、俯瞰図はこのフロアのものだ。時刻に相違ない数列が、『ラウア』語カウンターの位置に引っかけられてもいる。何度確認したところで待ち合わを示しているだろうほかに、思い当ることはなかった。にもかかわらず、どこにも送り主の記録は残されていない。その胡散臭さがまたアルトからため息を引き出させる。

ホロレターを投げ出していた。手はそのまま無煙タバコを探すと、うんざりする気持ちに紛らわせて無意識のうちに作業着の胸ポケットをまさぐり始める。

ここは広大な宇宙の僻地に浮かぶ中継コロニー『フェイオン』。蜂の巣のように格納庫を並べた二本の発着リングを串刺すメインシャフト第二十八階層、ハウスマジューール『ミルト』だ。

フロアはシャフトの形状同様に円形かつ広大で、壁沿いにアルトの寄りかかる『ラ

ウア』語を含む総計三千とんで二十八種の言語別カウンターを一枚板でぐるり、据え置いてある。

出入りを促すゲートは時計の文字盤さながら、カウンターを等間隔に区切っており、ばめられ、そのどれも隣接モジュール名を連ねたアーチを掲げていた。

言うまでもなく、中継コロニーには昼夜の境界がない。そのためゲートをくぐって出入りにする者の姿にも切れ目はなく、おかげでフロア内はゲートへ向かう者と好みのカウンターへ向かう者、そして変化自在なフレキシブルシートが散らばるフロア中央に至ってまで、万種入り乱れて終わりになき大盛況を繰り広げていた。もちろんそのほとんどが燃料補給の傍ら訪れた、長距離航行就労者たちだ。

安直なグローバル化の果てに、世界は今や情報同様、物理面での同時性をも強く要求して止まず、今や長距離航行就労者数は全労働者数の三割にまで伸びている。もちろんこれは認識されているうちの統計にすぎず、もぐりの数に入れたなら五割に達するかもしれない。そしてその誰もが広大な空間でのスピーディな輸送を要求され、どれほど運搬路が整備され輸送船機能が向上しようとも追いつかぬ即時性に、劣悪極まる労働環境の元、奔走していた。

補って通信や映像技術の革新は数度、起きている。だが限られた刺激と空間に長く閉じ込められた者が発症する『イルサリ症候群』は、居住環境のもたらす弊害として今もなお解決していない。

この『イルサリ症候群』、そのもそもはホームシックからくる鬱状態だ、とあしらわれてきた各種症状だった。具体的に挙げるなら、極端な感情の萎縮を経て、不可逆的な外部刺激への無反応状態が特徴的な病ともいえる。果てに自我消失を招くことから、発見された当初は長距離航行就労者の奇病とも呼ばれ、ホームシックなどと言う一方でそれ以上、ひどく恐れられてもいた。

だからして発症はもっぱら航行中と決まっている。果てに船長を失った船は失踪し、ある日、突然、放置船となつて発見されるという成り行きがオーソドックスだ。その中からミイラと干からびた主が見つげ出されるたび、関係者は明日は我が身と表情を曇らせてきたのだった。

ゆえに過去、物流関係からの就労者離れが起こつたのも当然のなりゆきだろう。だが放置すれば世界はたちまち立ち行かなくなるのだから、連邦はすぐにも政策を打ち出していた。それがこれらハウスマジュールの運営だった。

『いかなる種族も持ちうる郷愁と枯渇している物理他者を利用することで、埋没しつつある感情を掘り起こす』

ハウスモジュールの設営理念は、実にご立派なものだ。

きっかけを作った症候群研究の権威は、病名にも名が残されている亡き連邦局名医、ドクター・イルサリである。そして名は病と共に、こうして今や広く既知宇宙で知られることにもなっていた。

そろそろ目の前の『ラウア』語店員も、黙りこくる自分を本気でそんな症候群患者だと疑い始めているのではないだろうか。アルトはうがる。もちろん保健員に通報されてはかなわないと、最初、優勢十三種の言語で構成された公用語、いわゆる混合造語で話しかけもしている。だがネイティブ店員などという仕事につくこと自体、造語が話せないせいだという偏見通りか、店員が答えて返す様子はなかった。

いや、混合造語は連邦政府がごり押しで公用化を決定した言語だったなら、普及の際、自らの文化を、言語圏を保護すべくテロまがいの行為で抵抗を続けた少数派言語圏種族がいたことは誰もが知る事実だ。『ラウア』語は閑散としたカウンターを見て

の通り、少数派、拒絶組である。敵言語と、造語を無視したところで気持ちにくめば文句こそ言えなかった。

現に、そうして造語に解体されていった弱小種族は少なくない。それでも現地語を貫いた一部種族に至っては、経済活動からつまはじかれ、略奪で生計をたてる船賊になり下がっている者たちもいる。そのクチかと思えば、なおさら店員へかける「言葉」はなかった。

ただアルトはタバコの手先へ火を点ける。そう、同情されたいのは、こんな場所でもねばり続ける自分の方だと内心、吐きながら。

静まり返る『ラウア』語カウンターへ近づく者の影は、まだ見あたらぬ。

『金の手配は整ったぞ。ジャイロの方はどんなあんばいじゃ?』

コトは五十六万セコンド前にさかのぼる。

その時、馴染みのギルド、種族名『デフ6』のサス・フォーは、特徴でもある鼻と口の一体化した袋、鼻溜ハナタマリを揺らして強化アクリルで設えたドーム型のコクピットへ貼りつく通信ウインドより、アルトを覗き込んでいた。

世間からどれほど泥棒呼ばわりされようとも、エコロジをモットーに廃棄衛星、

放置コロニーに放置船、あらゆる浮遊物からリサイクル可能品を回収するジャンク屋へ、それらジャンクの買取りを担うギルドが大型貨物船『ドリー』の超空間ジャイロ買取りを発表したのは、さらにさかのぼること二十五万セコンドあまり前か。その価格はギルドが活動を始めて以来、最高を示す百七十万GKだった。サスの通信は、たぶんにもれずその争奪戦へ参加したアルトの送った、『ドリー』一番乗りを知らせるメールへの返信だった。

『万事、うまくいっとるのか？』

ギルド加盟店として引き取れば、本部から買い取り価格の二割を手数料として受け取ることとなっているサスの目が、聞けばのけぞるような年齢を帳消しにして鋭い光りを放つ。見上げてアルトはコクピット内、中央、もったいぶると操縦席で座りなおした。やがて心待ちにするサスの前へ、ジャイロどころかどこにでも転がっていそうなホロレターを一枚、突き出してみせる。サスはとたん表情を張り付かせ、しばし瞬きを繰り返したのち、その目へ老眼鏡をあてがった。念には念を入れて突き出されたホロレターをなめまわす。

『なんじや、ジャイロはその中でも入っておるのか？』

アルトへ会心の一撃を放った。

食らってアルトは、力が抜けたようにホロレターを下げる。

『なわけないだろ。だつたら百七十万のドリーどころじやすまない世紀の大発明だ』
何しろジャイロは三メートル四方の大物だ。引き取り側のサスがそのことを知らないはずもなく、アルトは軽く舌打ちする。それ以上の悪態を飲み込んだ。

『いや、お前のことじゃ。思わず期待したわい』

とぼけるサスに氣にした様子は無い。はずした老眼鏡を振り回して鼻溜を揺らし、高らかに笑つてみせた。

『そのあつかましき、見習いたいね。まったく』

持て余してアルトこそ閉口する。

『ならせいぜい、お前も長生きすることじゃな』

勝ち誇つたように付け加えたサスの調子は、そこで真剣なものに変わった。

『で、一体、何がどうした？』

軽く乗り出し、逸れた会話を本題へ引き戻す。ならアルトは吊り上げた片眉で、切り出してやることにする。

『化けちまったのさ』

『化け、た？』

『ドリーの船体に回収の足場を組んだとたん、物理配送員が自宅の警報に引っかかってね。考えもなかったぜ。ほんの十数分だ。ほんの十数分、通配送員とやり取りを交わしている間に、ジャイロをさらわれちまった。終わった時は、もぬけのからさ』
聞いたサスの鼻溜が、ため息のようなものについてとき大きく膨んだ。

『そいつは新手じやのう』

同情するというよりも、感心するかのような口ぶりだ。

『ああ、しかも相当に斬新な相手だね』

付け加えてアルトも言う。

『ただの匣じゃないらしい。転送されてきたホロレターの中には、コロニーフェイオ
ンへのナビプログラムと、待ち合わせらしき見取り図が保存されていた』

今一度、持ち上げそれを開いた。

『今から行って、野郎と話しをつけてくるつもりだ』

片手で閉じる。

『何だ？ つまりそいつはお前にジャイロを買い取れと言ってきておるのか？』

聞いたサスの顔は、あからさまに胡散臭げだ。目もくれずアルトは他人事のようにあしらい体を傾ける。

『さあな』

ホロレターを尻ポケットへ押し込んだ。

とたんサスの声は大きくなる。

『やめとけ。いくら報酬が百七十万とはいえ、相手は物理配送なんぞ値の張る罠を仕込んだやからじゃ。その日暮らしのジャンク屋ではあるまいて。お前、まさかツーフアイブの一件をもう忘れたというのではなからうな』

ツーフアイブの件とは、禁止されていた生物実験に失敗した新進気鋭の創薬会社、ツーフアイブメデイカルが、その処分にジャンク屋を利用した前代未聞の案件のことである。ウィルスの蔓延したラボをマニア垂涎の骨董AIサーバーだと情報改ざんしてギルドを煽り、乗り込んだアルトラ四名を滅菌ゲル送りにしたのだ。

『あれは対象がジャンク屋全体だった。だがこいつは名指しだせ。放っておけるかよ』
アルトの唇が、それこそ悪戯を咎められた子供のように尖る。返す言葉をなくしてサスは、腕を組むとしばしうなつた。

『とにかく、送金のラインは確保のままだ』

ここぞとばかりアルトは放つ。

『それからジャイロが持ち込まれたようならすぐにも連絡を頼む』

『わかつとる』

サスが答えるには答えていた。そうしてまたもや歯切れ悪く言葉をつづる。

『じゃがなあ……』

鼻溜は揺れ、その目で遠くを見つめた。

『お前に何かあつたら困るのう』

『そいつは、いたみいるね』

だがサスの心配は、アルトの思うところと明らかにちがっていたらしい。

『なにせわしの抱えるジャンク屋の中で、お前が一番の稼ぎ頭じゃからのう』

やおらすわるアルトの目。

『じいさん、あんた、そのあつかましさで身を滅ぼすぜ、きつとな』

言っていた。

煙が揺れる。

そうしてたどり着いた『フェイオン』。指示通り居座り続けた『ラウア』語カウンターで、かれこれ二時間。いや、さらにもう十五分も経ってしまっているか。だどいうのに今だアルトの元へづいてくる者は誰もいない。

「またもやため息を吐き出し、アルトはその目をぎよつ、と見開いた。

言うまでもなくコロニーでの有煙行為は厳禁だ。だからして持ち込んだ無煙タバコのはずだった。だというのにその先からは、心地よく煙が立ち上っている。慌てて煙草をカウンターへ押し付けた。否や、店員は動き出す。消化活動さながらアルトへ強烈な息を吐きかけた。胸を突く刺激臭が鼻を刺し、悶絶することしばし。残して店員は、保健員ならまだしも、とうとう警備を呼びに向かうつもりか、背後に設置された背蛇腹扉が業務用のエレベーターへと乗り込んでゆく。

「つたく、ドリーの呪いかよ」

「万が一を想定して作業着の背裏へは護身銃、コロニーへの持込が唯一許可されたガス銃、スタンエアを張り付けてきている。だがリミッターを解除したそれに相応の資格はなく、言葉で晴らせるイルサリ症候群の疑いよりも、こうなればそちらが見つかることの方が厄介となっていた。」

「むせ返りながら手近なゲートをアルトは探す。」

「見定めるが早いか踵を返した。」

「ジャンク屋のアルトとは、あなたのことか？」

「『ヒト』語はそのとき、投げかけられる。振り返っていた。」

とたんアルトは面食らう。

なぜならそこに立っていたのは、オレンジ色のつなぎを着込んだ、たてがみもパンクな一頭の、いやヒト同様の手足から察するに一人とでも言うべきか、ともかくライオンだったからだ。確かにメッセージにあった文言は『獅子の口は真実を語る』だろう。だがまんま現れるなどナンセンスが過ぎた。ぐうの音も出ないどころか、張り詰めていた気さえ抜ける。

「違う、のか？」

啞然としていれば、ライオンが首を傾げた。

だからして抜けた気を詰めこみなおすべく、アルトはカウンターへ手を伸ばす。

「く」の字に押し潰したばかりのタバコをつまみあげると、再びくわえて噛み潰した。早いか、放り出していたホログラムもまた引き寄せ突きつける。

「つまり、こいつを出したのはあんたつてワケだ」

二つ折のそれを開けばホログラムは飛び出し、琥珀色した目を、ライオンはそこへと寄せていった。

「何だ、これは？」

ご挨拶としかいいようがない。

「その顔で現れておいて、よく言うぜ」

瞬間だ。

「よかった！」

ライオンは、アルトの突き出すホロレターを払いのける。

「この顔を知っているのか！ このまま誰も気づかなければ、どうなることかと！」
やおらアルトへ抱きついた。

食らったなら肉体的衝撃か、精神的衝撃か。アルトの口からぶ、とくの字に折れた無縁タバコも吹き飛ぶ。

いやそもそもだ。ペットにしていたライオンを泣く泣く近所の惑星に捨てた記憶もなければ、夏、暑苦しいからという理由だけでライオンをフツた記憶も、ありはしなかった。それら全てがつまらない冗談だとして、こんなかぶり物を愛用する知人など記憶にないのだから、見知らぬ何某に抱きつかれて覚えるのは、至極生理的な居心地の悪さのみとなる。

「離せッ、この野郎ッ」

縄抜けさながらだ。アルトは身をよじった。

「心配ない。ちゃんとウイルスカーテンはくぐってきた」

余計、しがみつかれて、見当はずれの弁解さえ聞かされる。

「ああ、接触感染なら、俺もどんな菌を持つてるやら分かったもんじやないからなッ。俺はあんたの発表会に興味はないんだよ」

その腕をどうにか掴んでいた。力任せに捻り上げたなら、ようやく離れたライオンの体を突き飛ばしてやる。

「獅子の口は真実を語る。とつととハナシに入ろうぜ」

ライオンは背からカウンターへ倒れ込み、向かって吐けば、その様子はもうライオンというより猫が相当となっていた。

「わ、分かった。忘れていたわけではない。だがつい、安心してだな。ともかくこんなことには慣れていないのだ。それだけは理解してくれ」

捻り上げられた手首をさすりつつ、体を起こしてゆく。

「ならば取り急ぎ、お望みのものをあなたへ渡そう」

態勢を整えて足元を確保したなら、その手をパンクに逆立たたてがみへ持ち上げていった。中へ押し込んだところで、その手は確かと何かを探って動く。

瞬間にも、アルトはホロレターを投げ出していた。

そんな手を押さえて動きを制する。

「……きさま、何しやがるッ」

身に覚えがあるからこそだ。同時にもう片方の手で、背にあるスタンエアのグリッ
プもまた握り絞めると、吐きつける。

「そ、それはこちらのセリフだ。こんな場所でわたしを脅すつもりか？」

勢いに驚くライオンの目は丸い。

「その頭に何やら仕込んできたあんたに、いわれたくないね」

「わたしが？」

言うものだから、見せつけそうつと、たてがみの中からその手を引き抜いてやる。
手はそこで、ただ宙を泳いでいた。

「脅かし、やがって」

言うほかなくなる。

「当然だろう」

「冗談じゃねえ。話すんなら、このかぶりものを取ってからだ」

だというのにうろたえるライオンは、よほど正体を隠しておきたいらしい。

「と、とんでもない！ あなたはその意味を知っていつているのか！」

ならなおさらひん剥かずにおれなくなるのが、道理だろう。

「そいつは上出来な……」

だからしてアルトは、触れていたスタンエアから手を離す。

「返事だッ」

その手でライオンの面へ掴みかかった。

叫び声を上げたライオンが身をすくめる。

そのたてがみの一房に、伸ばしたアルトの指は触れた。

いや、そう感じた瞬間だった。

辺りが真つ暗闇に沈む。

「……なん？」

「だ？」

思わず動きを止めていた。

こぼさずにはおれず、その後をライオンが続けて一語を完成させる。ままに互いはそぞろと、辺りへ視線を這わせていった。

なにしろ電源は生命維持に直結している。放っておけないなら、経てふたりはこれがここ『ラウア』語カウンターだけの停電であることを知らされていた。

「まさか！」

とたんライオンの視線が弾き上がる。

「はあ？」

動きにつられてアルトもアゴを持ち上げていた。

そこに明け明星よろしく、光の点はきらめいている。見つめるほどにふたりの前で、その光は天井をたわませると、次第に大きく膨れ上がろうとしていた。

覇気のない降船客の列に紛れてネオンは宙(ソラ)を、見上げた。

とはいえ、ついたばかりのそこはまだコロニー『フェイオン』の発着リング、その一角に据えられた超大型船用格納庫内だ。機能性のみ、見上げたそこにはデザイン性のカケラも感じられない鉛色の天井が、数多くのメンテナンス機材をぶら下げ広がっている。振り返ればそこには超大型船『サウスプンカ』もまた、停泊していた。

かつては豪華な客船だったのだろう。そんな『サウスプンカ』は古代デザイン、今となつては専門家でしか知りえぬだろうアルデコを模した曲線をまとうと格納庫一杯、重力に反するかのごとく反り上がつて刃物のように美しいラインを見せつけている。船底の膨らみも熟れた果実と申し分ない豊かさをたたえていたが、繰り返された

塗膜補修跡のせいだ。今や表面はツギハギだらけで、その全てを台無しにしていた。

その乗降ハッチから降船客の列は、いまだ途切れることなく伸びている。そして長旅に重い足取りの彼らから、混合造語がもれきこえてくることはなかった。

瞬間、ネオンの中でくすぶっていた疑念は、確信へと変わる。おかげでヒールを鳴らし、周囲の迷惑かえりみず降船客の流れの中で立ち止まっていた。

「また出稼ぎ船だったって、ワケね」

苦々しく吐き捨てる。

間違いない。

『サウスプリンカ』はどう見ても廃棄される寸前の払い下げ船であり、乗って向かったこの場所もまた、僻地の中継コロニーときている。そこへ造語が使えぬため低所得者とならざるを得なかった彼らがごまんと送り込まれてきたというなら、これはハウスマジュールのネイティブ店員、そう呼ばれる出稼ぎ就労者の交代要員輸送だと判断するほかかった。

そんなネオンの内心を知らぬ存ぜぬの降船客たちは、迷惑そうにこそすれ、同情のかけらも見せず立ち止まったきりの背を追い抜いてゆく。

と、避け切れなかったのだろう、ついにそんなネオンの掲げる黒革のケースへぶつ

かる者はあつた。

「いいえ、これはあなたが早く借金を完済するためです」

聞き慣れた声は、体長五十センチ余り、体内にトラックボールを内包したネオンの自律モバイロロボット、通称モバイロだ。見れば黒革ケースの後ろで起き上がりこぼしのごとく、体を揺らしていた。

「なによそんなタテマエ。いくら安く上がるからって、航行規定に抵触するようなもぐりの船で、仮死強制かけられて移動の連続だなんて、これじゃ非人道的にもホドがあるわ」

ネオンはオフホワイトのライダージャケットを翻す。そんなモバイロへ体ごと振り返った。

「あたしは荷物じゃないの。だいたい仮死強制が嫌いなことも知ってるんでしょ？

それともあたしが造語、苦手だつてこと、皮肉り続けてるワケ？ とにかく、三回に一回くらいはヒトとして観光船で移動させて。これじゃ、仕事に響く」

だがモバイロの返事はつれない。

「いいえ、これはあなたが早く借金を完済するためです」

その小さな体に、ネオンの長距離移動をサポートする機能を詰め込んだがゆえ、最

低レベルとなつてしまったA Iの限界をみせつけてくれる。おかげで幾度となく聞かされたセリフに、まるで夢から覚めたかのように、ネオンは当り散らしてしまった自分をただ悔いた。

「どうせあんたなんて、ギルドのつけた見張り役よ」

再び床へヒールを突き刺す。クルリ身を翻した。追い抜かれた分を取り戻して猛然と降船客の中を急げば、取り残されそうになったモバイル口が慌ててトラックボールの駆動音を高く響かせ、その後につく。

「それは違います。あなたには特殊なスキルが備わっているのです。ですからこうして完済の機会が与えられました。わたしはそのサポートを目的とした自律型モバイルロボットです。見張り役ではありません」

「だから、それを見張り役だつて言ってるのに」

噛み付く意欲も失せたネオンの声を、モバイル口が拾う気配はない。だからしてセリフは、いつものくんだりへ突入していた。

「でなければ、あなた自身とその所有物は名前に至るまで、今頃ギルド独自のルートよつて換金が済まされていることでしょう」

聞き捨てネオンは、格納庫の壁面にかけられた淡いグリーンのウイルススクリーンを

くぐりぬける。格納庫と居住空間の合間に作りつけられた、チェックインエリアへ出た。

そこでジャケットに忍ばせていたチケットを引っ張り出す。降船客と同じ就労ゲートを潜るべく、乗船チケットの光学バーコードをゲートの読み取り機へかざした。

「我々は観光ゲートを利用します」

読み取るべく、機械が走査線を広げたところで、モバイル口が告げる。

「ここで観光者扱いなわけっ？」

「いいえ、これはあなたが早く借金を完済するためです」

唸れども、モバイル口はただ繰り返しただけだった。

……聞くとところによると、それは貨物船だったらしい。

もちろん『それ』とは、ネオンが黒革のケースと共に、仮死ポットに入ったままの状態で見送られた放置船のことだ。発見したのは、もとい、ギルドへ持ち込んだのは、換金を目的に回収したジャンク屋だとネオンは聞かされている。そのジャンク屋は懸賞金のかかった船でもなかったため、中身もあらためず鉄屑価格で丸ごとギルドへ売り払っていったらしい。

他に同乗していた有機体はいない。

もちろんギルドは、すぐさま船の何もかもを解体、転売した。

そう、ネオンの入った仮死ポッドだけを残して、だ。

そしてネオンもまたポッドから取り出された。恐らくネオンも含め、黒皮のケースもまた転売せんと、その中身を確認するためだったのだろう。

果てにネオンが聞かされた話は、こうである。

ポッドからの救出は、放置船ゆえポットに生じていた数々の管理不備により困難を極めた。蘇生を断念しこじ開けることも可能だったが、人道の見地から丁重に取り扱った結果、かかった費用は莫大となった。その全てをギルドが負担することは不可能である。そこで利息不要というかたちでの、蘇生費用の完済を求めると。

言いがかりにも、ホドがあった。だが全ては後の祭りで、すでにネオンのIDは船ごと転売されてしまっており、何よりそれが管理不備の影響なのか、蘇生以前の記憶もすつぽり消えてない。一文無しのうち自分がどこの誰なのかも分からないなどと、ギルドから逃げ出す以前の大問題だった。

ギルドの要求を受け入ることにしたのは、彼らの言い分が正しいと思ったからではない。ネオンには行く当ても、成すこともなかったからだ。借金を返す。記憶が戻る

まではそれをひとまず、自らのよりどころとして据えようと考えただけのことだった。

改め、乗船チケットを観光ゲートのバーにかざす。読み取りが終われば、霧のごとくゲート内部に立ち込めていた熱煙シャッターは両サイドへ吸い込まれ、ネオンの前に通路は開いた。そこに『ようこそフェイオンへ』の文字映像は走る。導かれるまま、ネオンはケースを握りなおした。外へと向かい、最初一步を踏み出す。

つまり現在使用している『ネオン』という名は、仮死ポットに記されていた名だ。その名で星間移動が可能となっているのも、モバイロが人質よろしく管理しているギルドの偽造ID、そのおかげだった。さらに、そこまでギルドが支援し、ネオンに借金返済をもとめるわけこそ、ケースの中に眠るコミュニケーションのせいだった。

世界が広大になりすぎたため生じた物理移動の限界に伴い、デジタル配信にすりかえられたことで今となつては滅亡したといわれる希少文化のひとつ。造語が確立するよりも遙か昔、言語代わりに異種間で重宝されていた地球の道具、サキソフォンというアナログ楽器が、黒革のケースの中におさめられていた物の正体だ。その値が破格

であることは当然ながら、滅亡したといわれるその音色の単価もまた半端ではなく、生音ライヴサウンドに憧れを抱く通称『ログジャンキー』を相手にすれば相当にうまい商売が成り立つ代物である。

だが奏でられなければそれまでとなり、そしていわずもがなギルドが目をつけ借金完済のあてにし、モバイル口も絶賛するネオンの特殊なスキルこそが、サキソフォンの演奏技術だった。

気密隔壁二枚分の厚みがあるゲートを通り抜ける。

記憶はなくしたが、技術はその体に染みつき今も残っていた。だからして借金を返済するため、今日もネオンは依頼者の元へ向かう。

格納庫から抜け出したそこで、延々伸びる通路へ顔を上げていた。

そう、遠心力を利用して重力を保つ発着リングはそこで、行き交う利用者をモザイクのごとく床へ貼り付け延々、通路を天へ伸び上げている。

利用者はそんな通路の各所にぶら下げられたインフォメーションホロより、行き先のマップを取り込んでいた。終えた者から次々と、メインシャフト行きのシャトルへ身をひるがえしている。

途切れることなく行き交うその姿が、そのたび混ぜ返される空気が、航行中には決して味わうことのない活気を創り続けていた。広大な無の中でまさに生きとし生ける物の世界を紡ぎ出していった。

「僻地に行くほど中継コロニーは大きくなるって聞くけど、こんなに巨大な所は初めて」

前にして圧倒され、ネオンは目を丸くする。

「誘導および、スケジュールの最終確認と調整に入ります」

その足元からモバイルは通路へと、飛び出していった。頭頂に埋め込んでいたモニターへ、早くも目的の地までの道のりを主観映像として、再生し始める。

「ちよつ、ちよつと待つてよ」

そんなモバイルによると、今回の依頼者名はドクター・イルサリ。種族、性別、年齢共に情報の提供はなく、指定演奏開始時刻は三十二分後が予定されていた。場所はメインシヤフト第二十八階層、ハウスマジュー『ルミルト』。ミルトへは申請済かつ、モバイルが管理しているバックヤードパスを起動することで入店でき、演奏内容に指定はなく、ドクター・イルサリからの接触があるとすれば演奏後である、ということが付け加えられる。

「って、なにそれ」

などと導かれるまま奥まったシャトル乗降口前に立ったところで、ネオンは我に返る。

「接触があるとすれば、ってどういうこと？ あたしにどっち向いて演奏しろっていうの？ それにドクター・イルサリはふざけすぎよ。いくらあたしだって知ってるんだから。死んだヒトの名前使うなんてなんだか気味が悪い」

だがモバイルが、その不快を共有することはない。

「演奏対象者はミルト利用者全員を予定。依頼者は他の利用者にまぎれての鑑賞を希望しています」

聞かされネオンは、さらなる不気味さに身震いした。

「きつ、しよく悪い。死人に成りすましたうえにコソコソ聞くなんて」

なら乗降口のドアも受けた風に震える。シャトルが到着したらしい。開いたドアの向こうから詰めていた利用者は吐き出され、入れ替わりでネオンとモバイルはシャトルへ乗り込んだ。

チューブの中を走行するシャトルの形状は球形だ。中でビンゴボールよろしく浮かび上がったシャトルは、やがてシャフトへ向かい滑り出す。音もないままお目当ての

第二十八階層で停止した。

開いたドアの向こうでは、シャフトの外周に沿って伸びる通路が左右に分かれ、緩やかなカーブを描き伸びている。シャトルを降りたほとんどの客は左右へ散ると、随所に設けられた『ミルト』のゲートへ消えていた。だがネオンはモバイロに連れられ右手へ進み、シャフト側の壁面に設置されたインフォメーション端末へ向かう。そこで、モバイロの管理していたバックヤードパス発行の暗証記号を打ち込んだ。次いで乗船チケットもまた、典型的な光学バーコードスキヤナヘかざす。バーコードが読み取られたところで引つ込めたなら端末は蛇腹扉に塞がれ、入れ替わりとそこへ呼び寄せられた一基のエレベータは姿を現していた。

臆することなく、中へモバイロが乗り込んでゆく。

一人がちようどのそこへ、ネオンも潜りこんでいった。

カプセルのようなエレベータ内から外をうかがうことは出来ない。ただ感覚だけで、下層へ移動していることだけを察する。やがてエレベータは、シャフト沿いの壁面に閉まったきりのドアを並べる階層へネオンを吐き出した。降りるさいエレベータ内、左手側のスリットから突き出されたバックヤードパスをもぎとり、ネオンはおっかなびっくりそれら風景を見回す。

「勝手に入るな、なんて怒られないわよね」

静かだ。静かすぎてついぞ言っていた。

「パスは帰りのエレベータに必要となりますので、紛失しないでください」
さらに聞き流したモバイロが、告げて通路をさらに右へ進んでゆく。

「やだ。分かりましたっ」

追いかければヒールの音が、辺りに響いて仕方ない。

呪いながらネオンは追いついたモバイロと並んで歩き、歩いて、歩いた。

歩いて歩き、さらに歩き続ける。

がしかし風景は変わらない。

並ぶドアだけが、ネオンの左右を淡々と流れていった。

その内側にネオンの靴音とモバイロの駆動音だけがメトロノームと響き続け、閉じ込められに等しい堂々巡りの感覚をネオンに抱かせる。だからしていくくらしも行ったところであらまらずネオンは、鼻歌なんぞを口にしていた。

それは何とも名もない、思い付きのメロデーだ。

だがそのメロデーは、単調だった足音を絡め取り始める。

シンコペーションからエイトビートのスネアドラムと、鼻歌の底を支えてリズムを

刻みだした。

感じ取れば前進が、やおらネオンの中で心地よい疾走感へ様変わりする。その視界は、沈黙の世界に一色、挿したように華やぎ、その色が相乗効果と靴音のグルーヴ感をさらに押し上げさえする。

気づけばまったくもってノリノリだった。

だからして上機嫌、ネオンは決まっていけない今日の演奏はこの曲でいこう、と思いつつ。なら掻き消えてしまいかねないこのメロディー芯はどこにあるのか。確かめんと、連なる音のはらんで教えるイメージへその顔を持ち上げていった。

そこに広がる空は深い。

飛び込み投げ出し、肌で感じ取ると、ネオンは漂うイメージを胸いっぱい吸い込んでいった。

瞬間、声は降る。

「ネオン、どこにいる！」

嫌と言うほど聞かされたダミ声だ。

驚きのあまりネオンは飛び跳ねていた。モバイロの頭頂モニターを、急ぎのぞき込む。なら映っていたのはネオンの知る限り唯一、造語を使わずに会話の出来る『テラ

タン』種族、そのトラだった。

ギルドから借金返済の管理を任されている、というトラは今日もそこで『テラタン』の特徴であるところの深いシワに、いや、ここまできれば皮膚のたるみといったほうが的確な溝に埋め尽くされた顔を、ブルンと震わせ郷土菓子『エスパ』を満足そうに頬張っている。

「今、どこにいると聞いているんだ！」

言う口から菓子クズは飛び散り、掴みかけていたイメージこそ、そこできれいさっぱり霧散していた。

「もお……、何なのよ」

がっかりより、ネオンはがつくりうなだれ答えて返す。

「何だ、その返事は。仕事はどうなっているんだと、ワシはさつきから何度も聞いているんだ」

知ったことかと続けるトラから吐き出される菓子クズは、何億光年離れていようと生理的に受け付けない類だ。

「今、向かっているとどこですっ」

避けてネオンは唸った。

が、トラの反応はこうだ。

「ふん、口からでまかせを言うな。なら『ガニメダ』行きの船に、お前のIDがないのはなぜだ」

「へ？ 何、それっ？」

寝耳に水の話である。

「て、ま、まさか、あなたまた、やったんじゃ……」

過る顛末に、声を震わせていた。

何しろどういうわけだかギルドから一銭の報酬も与えられていないトラの仕事ぶり
は、目も当てられないほどヒトかった。舞い込む演奏依頼を調整することなくモバイル
口へ転送したかと思えば、ダブルブッキングなど日常茶飯事。そのうえ、そうして焦
げ付いた経費をネオンの借金に上乗せするのだから、返済額も一向に減らないのだ。

「いいがかりはよせ。わしがいつそんなハマをした」

そしてその失態をトラが今まで、認めたことはない。

聞かされネオンは深く、深く息を吸い込んでゆく。

「言いがかりは、そっちでしょっ！」

ありったけと、吐き出した。

「あたしは今、フェイオンで、ドクター・イルサリを名乗る依頼主の元へ向かってるの。それに、そっちがモバイル口へ依頼情報を転送してるんだから、あたしが好きでこへこれるわけないじゃない。だいたいモバイル口もモバイルなのよ。ダブルブッキングしてるくらい判断できなくて何がAIよ。早く積み変えてって言ってるのにな！ いい？ とにかく、ガニメダなんて無理。その依頼はそっちで処理してっ！」

おかげではあはあ、息も上がる。

「ふん、ドクター・イルサリは死んだ。油を売するための言い訳なら、もっとマシな方法を考えるんだな」

あしらわれて怒り心頭、ネオンのこめかみにスジは立った。

「上等よっ！ どうせ油売るならこんな僻地より、地面のあるところへ行つてやるうっ！」

「いいか、先方はスケジュールを八十時間ずらしてもいいと言ってきた」

だがトラがうるたえることはない。

「二往復分の船賃を無駄にするな」

言い切ってみせる。

「二往復分っ？」

様子にむしろ、ネオンがうろたえた。

「む、無理っ！ だからここ僻地中の僻地なんだってば！ 一番近い所だって八十時間なんかじゃっ、無理っ！」

モバイロはそんな口論を涼しい顔で聞きながら、ネオンを導着し続けている。

「お前次第だ」

トラは言い、哀れむようにかぶりを振って指先に残った最後のエスパをシワの間に、いやそれは口だろう、口へ押し込んだ。通信を切るべくモニターへと、その手を伸ばす。

「わ、わわ！ 話にならないのはどっちよっ！ 聞いているのっ？」

が、ここで切られてはたまらない。ネオンは食い下がった。

「この、エビの尻尾野郎っ！」

ここぞで『テラタン』の侮蔑語を口走る。無論、それはしばしばトラに浴びせられることで覚えた文言だ。本来の意味は皆目不明だったが、通信を切らせないためならこのさい何だつてかまわなかった。なら願ったりかなったり。トラの動きはそこでピタリ、止まる。るみるうちにその顔に、複雑奇怪とシワは折りたたまれていった。やがて奥で、針の穴のように小さな目が赤く潤みはじめる。

「わ、ちよつ、ご、ごめんなきつ……」

まずい、と気づくが遅かった。

それきりだ。

映像は、プツリ切られる。

呼べど叫べどもうトラが答えて返すことはなくなっていた。

静寂に、いつしか立ち止まっていたネオンの肩もわなわな、震える。

「エビの尻尾野郎の、どこが悪いのよーっ！」

宙へ向かい、ネオンは吠えた。

向かってモバイロだけが、そんなネオンへ答えて返す。

「いえ、これはあなたが早く借金を返済するためです」

「……じゃなくて、また増えてるんですけど」

もう鼻歌など出てきやしない。足を引きずり、ネオンは道なりにコの字と通路を二度、曲がる。わずか数分の移動中にすっかりやつれて、ついに目的地へ到着していた。

「何、ここ？」

広がる空間の奥をのぞき込む目が死んでいようと、かまわない。何しろ明かりがなかった。ただぼつぼつと灯された作業灯が、かろうじて鉄骨らしきバツ印に組み上げ

られた重機を照らし出している。伸びあがったその重機はどうやら天井を支えているらしい。柱のような具合でもあった。死人を名乗る依頼主にこんな場所へ呼び出されるなど、気分はもはや最悪だ。

「帰るう……」

呻いていた。

その視界で、何かは動く。

依頼者かと思っていた。

なら見つめたそこでそれはまた、動いた。ついにネオンの元へ駆け寄ってくる。

「わらあおう！」

あつけらかんとした歓声は亡霊などと、ほど遠かった。そうしてネオンの前へ、体長一メートル余り、顔の真ん中に鼻溜を持った『デフ6』は飛び込んでくる。

『メンテナンスをしておけつていわれたから、きつと何かあると思つていたんだ！』
鼻溜はまだ左右非対称だからして、幼体だ。

『はじめまして。ぼく、デフ6のデミ』

フェイオンススタッフか。作業用つなぎを着込んでデミと名乗った『デフ6』はそこで、笑っていた。ままに、餌を待つひな鳥と首を長くして、デミはネオンの答えを

待つ。

おかげで小さな体へ詰め込んだ翻訳機能をフル働させ、モバイルは割り込もうとした。

『ネオン。約束。ここで会う。演奏』

ネオンは慌てて、苦手な造語をこま切れと口にしていった。何しろその容量に比例したお粗末極まるモバイルの翻訳機能は、事態を混乱させこそすれ、潤滑なコミュニケーションの橋渡しになつた試しがないのだ。

活躍の場を奪われてモバイルは、その場でクルリ向きを変えている。バツ印へ向かい走り去つて行つた。

『あんまり近づきすぎちゃ、挟まれちゃうよ。あ、でも乗つかるのは大丈夫なんだ』
気づいたデミが声をかけ、続けさまネオンへも告げる。その無邪気な笑顔は、子供ならではの、万族共通の愛らしさに満ちていた。

『駆動系もプログラムも単純だから、壊れようがなかったみたい。だから安心して』
証明すべく、作業つなぎのポケットから小さなバーを取り出す。バツ印へ向けボタンを押せば、とたんバツ印は鈍いうなり声を上げ動き出し、押し上げていた天井を下げだした。おかげで天井にはぽっかり穴はあくど、そこから光と喧騒は、暗くうすら

寒かったこの空間へどうつと一気に流れ込んできた。

デミの心配とおりバツ印に巻き込まれかけたモバイロが、少し離れた位置でトラックボールをしまい込んでいる。

「十二分後、こちらの昇降機でフロアへ上がります。起動は、昇降機に備わっているものを使用してください」

最後の段取りをネオンへ告げた。

聞いていたように、デミもそこから握っていたバーをネオンへ差し出している。

「せり上がれてことね。さすが派手さはドクター・イルサリを名乗るだけはあるつてわけだ」

ネオンはそれを受け取った。

『ありがとう』

デミへ微笑みかける。

さあ仕事だ、と受け取ったバーをジャケットのポケットへ落とし込んだ。提げ続けた黒革のケースを床に寝かせ、片耳のピアスを外す。そこには古典的な凹凸が刻まれたアルミ製の物理鍵が飾りとしてぶら下げられており、握ってネオンもまた、ケースの前に屈みこんだ。その側面には、小さな穴が開いている。ネオンは鍵を、あいた穴

へと差し込んだ。

『これ、物理ロックなの？』

そんなネオンの手元を、デミは興味津々のぞき込んでいる。

『ぼく、初めて見たよ。中には何かがあるの？ ねえ、ぼくも見ていい？』

少しばかり悩んでネオンは、うなずき返す。差し込んだ鍵を手首ごとひねり、跳ね上がった左右の金具を外して押し上げるようにふたを開いた。無数の傷にまみれ、複雑な構造をまとい付かせたU字の管は、横たわって姿を表す。

『すごいや……』

目にしたデミが大きく息を飲んでいった。

『これって、地球のアナログ楽器でしょっ？』

振り返ったその目は、隠しきれない好奇心に輝いている。

ネオンは微笑みでもってしてイエスと答え、首元からネックレスよろしくかけっぱなしにしていたストラップにそれをつないだ。立ち上がり、さらにケースの中から

「L」字型の小さい管を掴み出す。「U」字の片側へ差し込み、つなぎ目のネジを締め上げた。

『ぼく、初めて見たよ！ 本物？ だったらなんて名前？ ホントにミルトで演奏す

るの？ それともレプリカ？ 約束があるって……、会うつて言ったのは、もしかして演奏のため？ そんなの頼めるなんて聞いたことないよ！』

一挙一動を食い入るように見つめ、すっかり興奮したようすで鼻溜を振る。

聞きながらネオンはケースの傍ら、クツションへ突き刺さるように埋めこまれていた手のひらサイズのパーツもまた、つまみ出していた。L字の先端へねじ込みつなげ、デミへ一言、告げる。

『サキソフォン。本物。分からない』

ねじ込んだその先には、至極薄い板切れが固定されていた。これこそが、震えて音を作り出す要、リードと呼ばれるもので、外してネオンは唇で軽くくわえ、湿らせる。『ふーん。でも、本物じゃなくてもいいや！ 現存するアナログ楽器を見たなんて、帰ったらみんなに自慢できるもん！』

言われれば、どこか照れくさかった。はにかんで、湿つて程よく弾力の戻つたりードを元の位置へ固定しなおした。組上がりを確かめるべく、そうして管を両手で包み込むように掴む。とたん複雑な構造は整然とネオンの手の内におさまり、指先に丸い小さなキーはあてがわれていった。

それを下から順に弾き上げてゆく。てことバネの応用だ。そのたび管まわりで穴を

塞いでいたフタは開くと、カタカタ軽い音を立てた。動きで、そのどこにも不具合がないことをネオンは知る。

見届け、ケースから予備のリードもまた拾い上げた。もしものためと、パンツのポケットへ落と込む。

『少しだけ聞かせて！』

と声を張り上げたのはデミだ。

『ちよつとだけ、いいでしょ？』

言い分に、本当のところ困ったな、と思ってみる。何しろおねだりされているその音は、大事な商品なのだ。そうやすやすと振舞えはしなかった。しかし依頼主と向かい合う前、ひと鳴らししておかなければならないのも事実なら、昇降台をメンテナンスしてくれたお礼でいいだろう。ネオンは目配せでオーケーと返してやった。

『やった！』

跳ね上がるデミを見たなら、悪い気こそしない。

立ち上がり、抱きかかえるような具合で、ストラップと握った両手で管を固定しながら、管を軽く体にひきつけた。這わせた舌で己が唇もまた湿らせ、最後に差し込んだパーツを浅くくわえる。

それだけだ。

それだけでいつも集中力は、がぜんネオンの中で高まっていった。そしてそこから先、ルールは消え去り、あるとすればネオン自身とすり替わる。

任せて、立ち消えとなった通路の鼻歌へ、ネオンは再び意識を集中させていった。ダミ声にかき消されたイメージを捕らえなおすべく、静かにまぶたを閉じる。

だがうまく思い出せない。

待つて得られるものがあるなら待つてもみるが、当てがないならええい、と諦めていた。意を決し、ため気味のワン・ツーを細いヒールで打ち鳴らす。切れると同時にダミ声は腹の底まで深く鋭く吸い込んだ息を、一気に管へ送り込んだ。

とたん音へ変換されたネオンの息が、空間を裂いてビリリ、空気を震わせる。なら呼応して不鮮明だったメロディーは、あるべき姿を示してそのとき見上げたあの空からどっか、とネオンへ降った。

ならもう出し惜しみなどありえない。爆発的スピードで、ネオンはキーを弾き上げる。つむぎだされた音はあたかも一音であるかのようにうねり連なり、先を争い絡まり響いた。その縦横無尽さは、まるでついでることのない空中戦だ。

圧倒されて、デミが全身を硬直させていた。

それほどまでに音は、聞いたというよりも触れたというにふさわしいものだった。見えざる感触で、そこに確かと何かがあることを叫び続ける。だからといってこれが何であるのかを位置づけようと言葉を手繰れば、その正体は遠ざかっていった。放棄すればするほどに、輪郭はくつきり浮かびあがつて耳にした者を翻弄する。つまりは感動。

それともただの暴動か。

わずか八小節。ネオンはそこで管から唇を離していた。

『ありがとう』

本日最初の客に軽く会釈する。

軽い身震いと共に、デミが我を取り戻していた。

『……びっくりした。びりびりくるよ。すごく、不思議な音だね』

『続き、上』

ストラップの長さを調節し直しつつ、ネオンは目でフロアを指し示す。

『そうしたいけど』

初めてデミが口ごもった。一呼吸おき、その顔を上げる。

『ぼく、次の船でうちへ帰らなきゃいけないんだ。まだ荷物もまとめてないし。だか

ら、今、聞きたかったの。遅れると困るもんね』

なら仕方ないと、ネオンは肩をすくめていた。そうして潰れたバツ印へ向きなおる。
「時間です」

傍らにうずくまっていたモバイロも、ちょうどと知らせネオンを促していた。

『帰ってみんなに自慢しなきゃ!』

ほどけるように通路へ向かい、デミが駆け出してゆく。

『修理。ありがとう』

呼びかけネオンも、バツ印へ向かっていた。

『バイバイ、おねえちゃん!』

ひとまたぎ、飛び乗れば、千切れんばかりに手を振ったデミの姿は、通路の奥へ消えて行くところだった。

『バイバイ!』

つられて手を振り返す。誰かを見送るなど、久方ぶりが贅沢だと思えてならなかった。おかげで緩んだ頬をネオンは今一度、引き締めなおす。

「さてと、行きますか」

ジャケットからバーを取り出し、せり上がるべく、そのボタンへ指をかける。

だが押すか押すまいか、その時だ。
ネオンの頭上で破裂音は鳴り響いていた。

膨れ上がった光が天井をたわませ、零れ落ちそうに揺れていた。
抜け落ちる。

そのときアルトにライオンは予感する。

刹那、ライオンが身を躍らせていた。

掴んだきりのその体に、アルトもまた引きずり倒される。振り切つて逃げたライオンのことなど二の次だ。すぐさま反転。クラウチングスタートよろしく床を蹴り出した。が、わずか二歩で、その足先に何は引つかかる。やたら重いせいで蹴り飛ばせないなら、アルトの方こそ吹き飛んでいた。

瞬間、白飛びしたのは視界だ。

続き、破裂音は鳴り響いていた。

つまづき浮き上がっていたはずの体が、吹き飛ばされる。

ままにどうつ、と床へ叩きつけられていた。

追いかけて降り注ぐ破片が、華奢な音を立てている。

一部始終に、フロアのバカ騒はピタリ、止んだようだった。

追い打ちをかけ、『ミルト』の全照明はそのとき落ちる。

利用者たちの間から、心もとない悲鳴が上がった。

聞きながらアルトは、ゆっくり体を起こしてゆく。明かりのないはずの視界には、

白く光りが灯っていた。閃光の残像だ。ほかに怪我らしい怪我はないらしい。証拠に足元から聞こえてくる微かなうめき声もまた、しつかり耳にしていた。

そこで青緑色の非常灯は灯される。

照らし出されてそこに、脇腹を抱えて丸まるライオンを見つめる。呻き声はそんなライオンのものらしく、さらにその向こうには黒焦げとなり、茹で上がったばかりと煙を上げる『ラウア』語カウンターがあった。一枚板で繋がったその左右には、つきさきほどまで飯を食らい、酒をたしなんでいた利用者が吹き飛ばされると散らばり倒れている。

高圧放電銃、スパークショット。

光景に、アルトは確信した。

この一撃はその固め撃ちとしか考えられず、作業着の背からスタンエアを剥ぎ取る。

銃床をヒザへ叩きつけ、エアを装填するが早いか、低い姿勢のまままで散らばる破片をかき分け、ライオンの元へと床を滑った。

その音に気付きライオンが、息を吹き返したように床をかきですが、手足の動きがバラバラなら、全くもつて要領を得ていない。すぐにも覆いかぶさりアルトはその襟首を掴み上げると、力任せにその体をひっくり返した。おののく獣面へ、握る銃口を押しつけ言い放つ。

「よおく分かった。学芸会の意味はこの時間稼ぎか？ あんたも捨て身だつてのなら上等だ。いいか、今すぐ仲間の武装を解除させるッ。でなけりや、今度こそその頭、吹き飛ばすッ」

本気を示して、あからさまとトリガーへ力を込めた。

「う、撃つな！」

などとだいたいにブツ放しておいて、それこそない。

なら視界の隅だ。何かは動いた。おや、と見れば、黒焦げとなった『ラウア』語力ウンターの真上から、ロープは一本、垂れてくる。出入り口こそそこになく、おっつけ視線を這わせてアルトは目を疑った。

「じよ、冗談だろ」

船賊だ。

身の丈ほどのスパークショットを背負うと、棒切れに腕を四本、足を二本刺したような独特の体型へ、感電防止のラバースーツとフルフェイスのガスマスクをまとった極Y種族らは、今まさに開けた穴からミルトフロアへ滑り降りてこようとしている。

そんな彼らこそ造語習得の波に乗り遅れたがゆえ、経済活動からつま弾かれた僻地種族であり、強盗、略奪、闇売買等、行うことで生計を立てるならず者に間違いないなかつた。

「あれのどこがわたしの仲間だ！ あなたたちに関わって以来、やつらに、つけまわされているのはわたしの方なのだぞ！ 武装解除させたいのなら、あなた自身で交渉してくれ！」

指を突きつけ言い放つライオンこそ、必死の形相だ。

ラバーソールのせいだろう。うちにも音なくカウンターへ着地した極Yたちが、二本の手で磁気ハーネスをロープから切り離し、上二本の手で棒術さながらスパークショットを振りかざしていた。目の当たりにして、ごたごたほざく聞こそなくなる。だからしてアルトとライオンの息は自然、そこで合っていた。

「とにかく！」

「逃げろッ！」

きびすを返せば、目にしたフロアの利用者たちもまた、悲鳴を上げて各ゲートへ引き潮のごとく逃げ出してゆく。

追いつけ追い越せ。ふたりもその中へ身を踊り込ませた。狙い定めてスパークショットの青白い閃光は、放たれる。

後方で見知らぬ利用者は焼かれ、接触していた周囲の数体が感電してみごと四方へ弾け飛び、辺りのパニックへ拍車をかけた。

「せつかく奴らをまいて来たというのに！」

どうやらそれがごとく遅刻してきた理由らしい。唸るライオンがたてがみを逆立てる。

「つか、全然、まけてねえぞッ」

「ただのボイスメツセンジャーにこんな依頼を押し付けるあなたたちが、無謀なのだ！」

「ボイスメツセンジャー？」

記憶補助装置と模擬声帯を体内に埋め込み、声帯模写でもってして肉声のメッセーヂを届ける福祉事業、それがボイスメツセーヂだ。ボイスメツセンジャーとはその事

業に従事する者の呼び名で、遠く離れた家族や恋人同士のやり取りに、遺言や生体認証の代行等、肉声を売りにした仕事の幅はとにかく広いことで知られていた。そしていうまでもなくアルトに、そんなものをやり取りする相手こそいない。

カウンタからあふれて極Yたちは、群衆に消えたふたりをおいかけ、フロアへ向かい走り出している。

様子に逃げまどう利用者たちは、許容量オーバーとゲートを詰まらせていた。

「あんだだッ」

見回して、だからこそアルトはライオンの頭へ手を伸ばす。それが仕組まれたことなのかどうかは分からなかったが、どう考えても目立つかぶり物は極Yにとって格好の目印に違いないと、押さえ込んだ。

はずが、その手は空を切る。それどころか頭の中へめり込み、ライオンのアゴ付近から突き出した。支えをなくしたアルトはライオンへのしかかり、ライオンは悲鳴を上げて、ふたりそろって群集の中へ倒れ込む。

周囲を、逃げ惑う利用者の足が踏み散らしていた。

痛みに歪めた顔でアルトは、ライオンの頭から腕を引き抜く。

「まさか、こいつ義顔ッ？」

それきりのされたように気を失ったライオンは答えない。

「おい、起きろッ」

その体を揺さぶる。ならタイミングは最悪だ。前方ゲートを逆流して、スパークシヨットを放ち極Yたちはなだれこんできた。周囲の混乱はさらに増し、あらゆる言語の悲鳴と怒号が頭上で飛び交う。おかげで叩き起こされたか、意識を取り戻したライオンが、がば、と置き上がっていた。

「馬鹿もん！ パラシエントの頭を触るとは、どういう見だ！」

なるほどどうやらこのライオン、自分が光の屈折率を操ることで様々な義顔を使い分け、一生素顔を隠して過ごす種族『パラシエント』だったらしい。そうまでする彼らにとつて素顔を晒すことは、ましてや触れられることは屈辱かつ破廉恥の極みにほかならず、『ラウア』語カウンセラーで素顔についてを探られることをひどく嫌ったワケももうなずけた。

「そこまで気が回るかよッ」

理解したところで、今さらだ。

「この顔を待ち合わせの目印にするため、パラシエントのボイスメッセンジャーを選んだのはそちらだろう！」

顔へ、痺れを切らしたようにライオンが吐きつける。

「選んだ？ 冗談。なら俺は、アンタの依頼主にはめられたってことだ」
その襟首を掴んでアルトは、ともかく立ち上がったいた。

「あんたの依頼人は誰だ」

放電音は、刻一刻と迫りつつある。

「面と向かって受けなら、断っている。依頼主には会っていない。わたしは匿名のホ
ロレターでこの依頼を受けた」

「また、匿名のホロレターかよッ」

いつからブームは電子メールから物理配送なんぞに変わったのか。

「そのメッセージ、本当にあるんだな」

確かめていた。

「それがわたしの仕事だ。そして、その仕事を途中で邪魔したのは、あなただ」

「だったら責任もって聞いてやるよッ」

こうなればライオンの記録した声色のみが、仕掛けた輩を割り出す唯一の手がかりだ。そのためにもこの場から脱出する。決めてむさぼるように活路を探せばフロア中央の円形ステージに、黒く影を落とすくぼみが口を開いていることに、気づかされ

る。

「あんたッ 俺に遅れるなッ」

この状況で迷うなどと、命取り以外の何ものでもなかった。一喝するが早いか、アルトはステージめがけ走り出す。それがゲートへ殺到していた利用者たちの中から抜け出す行為だろうと、かまわない。周囲が心もとなくなったなら、蹴散らされて折り重なったフレキシブルシート影へ、身を紛らせた。かき分け、這い出してほふく前進。とにかく円形ステージへ急ぐ。目の前に迫ったところで、転がるフレキシブルシートの影にいったん、その背を押しつけた。

「分かったから、その顔、いい加減、ほかのヤツに変えてくれ」

慣れないアクロバットの連続に、アドレナリン全開のライオンも遅れてなんとか、そんなアルトの隣に肩を並べている。投げつけアルトは、極Yの様子をうかがった。「無茶を言うな。やつらをまくのに義顔を全て使い切った。後は公用の顔しかない。さらして、やつらと顔見知りになるつもりはない」

ゲート前を焼き払い終えた極Yたちは、見失った、と言わんばかりそこで辺りを見回している。

「おい、待てよ、あんた」

だからこそ、事実気づかされてもいた。

「それじゃ、話がおかしいぜ。あんたはホロレターで依頼を受けたと言ったが、なら、会わずに誰の声をコピーした？」

つまり、ついた嘘でマーケティング代わりを務められても、困るというものだ。

「カウンスラーだ。受け渡しにこの顔を使うことと、カウンスラーの音窟でメッセー
ジを採取することが、ホロレターに指示されていた」

同時に突きつけられていたスタンエアに両手を挙げてライオンが、急ぎ教える。

などと音窟は、無限反響洞窟とも言われる惑星『カウンスラー』の音窟のことだ。

原住種族たちの声を封じ込めた無数の小部屋が、惑星全体を覆い尽くす既知宇宙でも
一位、二位を争う巨大遺跡のことだった。

近年になってようやくその価値は見直されると、保護活動も進められていると聞く
が、盗掘の進んだ小部屋は今や記念メッセー
ジを吹き込むための観光名所ともなっ
ており、そこから採取したという話ははま
んざら嘘だとも言い難い。

「奴らにつけられ始めたのも、音窟からだ」

加えて明かすライオンから、アルトは少しばかりもつたいをつけ銃口を逸らしてい
た。

その頭上を、火の玉と化したフレキシブルシートが飛んでゆく。

唐突さに首をすくめたなら、中に詰め込まれた液状シリコンへ火を回したそれは、古い手品よろしくボン、と宙で爆発していた。辺りに黒煙がもう、と広がる。飲み込まれてふたりは思わず身を伏せていた。

「もう、終わりだ」

うめくライオンは、それでいいらしい。

「バカ言うな」

ふたりを見失った極Yたちはいぶりだすべく床に転がるフレキシブルシートをスパークショットで弾き飛ばしながら、フロアへの侵攻を始めている。

「飛び込むぞ」

吐きつけアルトは、そのアゴで円形ステージを示した。

「な、深かさは……!」

「メンテナンス上、モジュールサイズは一定だ。これだけ天井がありや、底はしれてる」

言って押さえつけたものの、憶測を出ない。そして確かめておれる猶予こそ、なかった。

「あんたが先に飛び込めッ」

残してアルトは、身を隠していたそこから飛び出す。

ステージ目へと一気に踊り上がった。

そこに障害物がないなら、丸見えだ。むしろここにいますよ、と知らせて現れたようなその姿に、目にした極Yの下二本の腕がざわめき、あちこちで振られる。手信号ともとれる独特のジェスチャーは、あつという間に集団の中を伝播し、動きはひとつへまとまりだした。

そう、この極Y地方が造語の流れに乗れなかった最大の理由は、元来音声言語を使用しない種族だったせいだ。

「ぼやぼやするなッ」

ステージ上からライオンへ、アルトは怒鳴りつける。

「ええい、くそ！」

もう引けない。吐き捨てライオンも、ステージへ這い上がる。

目指して極Yたちはぐるり三百六十度から、先を争い駆け寄ろうとしていた。

追い立てられてライオンは、それこそ獣よろしく四つん這いで穴へすり寄り、のぞき込む。

「どうだツ？」

背に回してアルトは投げた。

「せかすな！ 下に何か……」

知らせてライオンは顔を上げる。

目に、アルトの頭上付近、たわむ天井は映り込んでいた。瞬間、破裂音は鳴り響く。天井を突き破り閃光は、まさにふたりが飛び出してきたばかりのフレキシブルシートへ突き立った。勢いに潰れて中から液状シリコンは飛び散り、表面を閃光が走る。かと思えば火薬よろしくあの爆発は、目と鼻の先で起きた。

黒煙が、周囲のシートに食料を巻き上げ立ち上る。

吹き飛ばされてアルトもまた、ステージへ伏せた。

ここぞとばかり駆け寄っていた極Yたちの足は止まり、やがて降り注ぐあれやこれやを電極で払いのける。確保しなおした視界へ向け、改め電極を構えなおした。

「ジャンク屋、前だ！」

叫んだライオンのタイミングに、これ以上はない。

聞いてアルトは伏せていたそこから、わずか体を持ち上げる。

「くっそッ」

負けじとスタンエアを突きつけ返が、複数を相手に狙いは定めようがない。破れかぶれと爆発の勢いで足元へ吹き飛ばされてきたシートを、狙い撃った。

なら食らったシートがひしやげて吹き飛び、例のごとく千切れて中身をぶちまけたなら、間髪入れずそこへ放たれたスパークショットの閃光は飛び込んできた。

液状シリコンの表面を、例外なく閃光は走る。

爆発は巻き起こった。

伏せ損ねたアルトの体はステージの上を転がる。かろうじて張り付き上下をとらえなおしたなら、そこに煙の粒子で乱反射を起こしたライオンの顔が穴だらけと、浮いていた。

「構えてろツ」

ステージを押し出し、アルトはそんなライオンへ駆け寄る。あも、うもありはしない。その尻を蹴り飛ばした。もともと覗き込む格好だったライオンの体は、とたんあつけないほど簡単に穴へ落ちる。追いかけてアルトも身を翻した。四方から放たれた閃光が、その頭上で交差する。続けさま、明かり全てが落ちていた。

暗闇がネオンを包み、その中でモバイロの動作ランプだけ浮かび上がる。

「第二十八階層、ハウスモジュールにて電気系トラブル発生」

だからなのか、重なり悲鳴が降っていた。

なだめて遅ればせながら、青緑色の非常灯が視界をフラットに照らしだす。

「および、発着リング、トップサイドに使用制限あり。使用制限は、無許可船体、複数の横付けによるものと確認」

ただなかでネオンがぱちくり、目を瞬かせたことはいうまでもない。

「む、きよかせん、たい？」

「その中の一艘は、広域指定流奪船と判明。管理センターは五分四十三秒前、救難信号を発信。二分九秒前、全モジュールに退避勧告を発令しました。これより現在フェイオンは、船賊の強襲を受けているものと判断します」

やおらネオンのこめかみは引きつる。

「だーっ！ 何がドクター・イルサリよっ！ この疫病神があっ！ 今すぐ逃げる。

トラに連絡とつてっ！」

でなければまた勝手にキャンセルしたとケチをつけられ、借金を増やされかねない。

「現在、強力な磁場の発生により、通信状況が安定しません」

にもかかわらずしれつと伝えるモバイル口は、わざとなのか。

「もういいつ。避難路確保っ！」

目がけてネオンは指を突きつけ、反応したモバイル口の頭頂モニターへ主観映像による避難経路は映し出された。

「現在、モジュール内、全システムダウン。再起動まで十五分の予定」

だが事は、電気系のトラブルに始まっている。

「従ってエレベータは使用不可。回避ルート。正面通路を右折。右折。T字路を右折。道なり、進行方向十字路を左折。従業員通用口から非常階段機密ハッチをパスで解除。スロープで隣接モジュールへ移動、い、い、いど……どう……」

そこでモバイル口の説明は途切れる。

「ちよ、ちよつと、しつかりしてよっ！」

言わずにおれない。だがモニターへのノイズは走り、それがアナログの極致だろうと思わずネオンはモバイル口を叩きつけたなら、ついにモバイル口から火は噴き上がった。

「きゃっ！」

同時に頭上で炸裂する、とびきりの破裂音。

飛び上がって、縮めた体でネオンはとにかく耳をふさぐ。目さえ閉じかけたなら、

そんなネオンの傍らをかすめて空から何かは落ちてきた。

見れば穴だらけの頭だ。足元に転がっている。ついた手足はヒト同様とで、近感を覚えるはずだったがネオンにその余裕こそありはしなかった。これでもか、で悲鳴を上げる。

「どけえッ」

掻き消す怒号に、しかしながら続かない。あいた口もそのままだ。顔を上げていた。覆いかぶさる影の前に、ただ握っていたバーを放り出す。飛びのくが相当と、逃れてそこから身をよじった。

ならまきに入れ替わりだ。影だったそれはネオンの立って場所へ着地する。

「寝てる場合かッ」

穴だらけの頭へ駆け寄っていった。

「蹴り落とすなど、あなたこそわたしを殺す気か！」

見れば、返す頭で穴はみるみる塞がってゆく。そこに毛むくじやらの顔は現れていた。

「つべこべ言うなッ。緊急事態だろうがッ」

「な、なん、なの……」

それきりふたりは、昇降機から飛び降りる。

「それから、あんたッ」

やおら振り返ったふたり目に、指されていた。しかもその手はスタンエアを握り絞めていたのだから、反射的にネオンの両手も持ち上がる。

「ぼ、暴力反対ッ」

「何言ってるッ。聞こえてんなら早くそこから逃げろッ」

「へ？」

そこでようやく、言語に容姿が『ヒト』の男であることに気づく。だがそのときにはもう、通路へ走り去った後となっていた。

「ち、ちよつとっ……っ！」

そんなネオンの視界が陰る。

次は何かと思うほかない。

おや、と見回し、ネオンはアゴを持ち上げていた。

「げ……」

こぼす。

なにしろそこにラバースーツにガスマスクの一団は、ずらり、並んでいた。切り取

られた天上からネオンをじつ、と見下ろしている。しかも今日はそんな穴へやたら身を投じる輩が多いらしい。一呼吸おいたその後、ガスマスクたちも多分に漏れずネオンの頭上へ降った。

「うっそーお！」

逃げるというより押し出されるが相当だ。身の置き場を奪われネオンは、昇降機から飛び降りる。非常灯がぼんやり灯る通路に飛び込めば、追いかけて放たれた閃光が視界の隅で蒼く爆ぜた。

頭を下げて縮こまる。そのままの姿勢で行き当たった曲がり角を、体当たりと押し出し曲がった。

「冗談でしょおっ！」

胸元に吊られた楽器を掴んで身を起こせば、先に行つたはずの男と毛むくじやらが立ち往生しているのを見つける。シャフト沿いの通路へ出たところだ。右へ行くのか左へ行くのかで迷っているらしい。

「そこ右っ！」

上げたネオンの声に、ふたりが振り返っていた。しばし迷つたように足踏みすると、言つた通りと床を蹴り出す。おっつけネオンも通路へ飛び出せば、あつただろうパニ

ツクの痕跡だけを残して開け放たれたドアは、緩いカーブの向こうへ並んだ。

「あんた、この従業員なのかッ？」

投げかけたのは、速度を落としてネオンへ肩を並べた男だ。

「まさかッ！ モバイロで退路を探させただけよ」

言うしかなく、ネオンはオフホワイトのライダージャケットを引っ張り身分を示す。

「助かった。ここは不慣れなのだ」

言う毛むくじやらが、振り返っていた。

「そのモバイロはどこに？」

男が続ける。

「スパークシヨットの影響でしょ。わたしのIDごとパンクッ！」

それはもう、卒倒しそうな現実だ。

「そいつはご愁傷様だな」

している場合でないなら、男は聞き流していた。

「とにかくこの先を左折したら、あたしの持つてるパスで開く扉があるわ」

「助かるッ」

傍らを、モバイロと降りたエレベータの蛇腹扉は流れていく。やりすごせば左手に

目指す岐路は姿を現した。

さんにん連なり、最短距離でカーブを切る。

突き当りには、電気系トラブルとは無縁の循環式光粒子ロックの重たげな鉄扉が立ちふさがっていた。

が鉄扉はそのときゆう、と浮き上がる。

「うそっ！」

奥から見飽きたガスマスクが現れたのだから、そこで回れ右は強制される。

「クソッ」

「一体、どれだけいるのだ！」

それぞれの足が、けたたましく床を打っていた。

「とにかく、前進っ！」

シャフト沿いへ戻れば、そんなこんなタイムロスか、増えた背後の数のせいか、控えめなラバーソールの靴音は背後へ大きく迫っている。拳句の果てに閃光は放たれると、行く手を焦がし始めた。

「だあああ、もう駄目だ」

毛むくじやらの叫びは間違っていない。だからして男も、逃げ出し開け放たれたま

まのドアを掴む。

「お前ら、こつちだ」

中へと身を滑り込ませた。行き過ぎかけた毛むくじやらに、足をもつれさせたネオンもどうにか身を躍らせる。

見届け男がドアを閉めた。

ノブにつけられていた磁気錠のコイルを落として外へ、耳をそばだてる。

ドア向こうを駆け抜けてゆくラバーソールの足音に、迷う素振りはうかがえなかった。ままに消え入りかけて、入り乱れるとあろうことか戻ってくる。

「くそッ」

ここにいることを知っているかのようだ。やおら乱暴とひねられるドアノブが、さんんんの目の前で暴れた。落とされていた磁気錠のコイルが小刻みに震え、見る間にシヨートすると薄く煙を立ち上らせ始める。

「あ、あたしのせい？」

なにしろアナログ楽器という、至極高価な逸品の持ち主なのだ。

「悪いが、俺を追って来たって話だ」

ただして男が、背でネオンと毛むくじやらを押しやった。

後ずさりながらネオンはともかく、脱ぎ去ったジャケットで楽器をくるむ。縛り上げた袖へ腕を通すと、背に担ぎあげた。

「ならあなたラッキーかも。これ見たら、きつと向こうも気が変わるわ」

とたん揺さぶり続けられた磁気鍵から火花は飛び、小さな炎は揺らめき上がり、そんなドアへ男はスタンエアを持ち上げた。

だからして気づき、ネオンは息をのむ。そう、磁気錠は稼動中なのだ。モバイロが言っていたシステム再起動は、思ったより早く終了していたらしい。つまり、と部屋を見回していた。なら有り難くも壁面に、据えつけられたエレベータはある。

「あれっ！」

「どうしたツ？」

駆け出せば、男が驚き声を上げていた。

「エレベータが動くかもっ！」

ネオンは投げ返し、エレベータの前に立つ。所詮、ちやちな磁気錠は見せ掛けだけの防犯鍵だ。この辺りが限界と炎がコイルを焼き切る前にと、懐へ指を伸ばす。空を切つて違うと、楽器をくるんで背中へ回したジャケットを手繰り寄せた。よれたそこからパスを引っ張り出す。とたん拘束状態から開放された光学バーコードはフワリ、

ネオンの前に立ち上がり、再起動で登録が抹消されていないことを祈りつつネオンは蛇腹扉へそれをかざした。

「お願いっ！」

瞬間、走査線はそこに広がる。光学バーコードへ吸い付くとIDを読み取り始めた。ものの数秒だ。下りていた蛇腹扉は解放される。

「やったっ！」

跳ね上がった振る手に加減はない。

「こっちっ！」

見て取った毛むくじやらが、踵を返していた。ドアへ背を向けることをためらいつつも、男もやがて床を蹴る。

その背で、コイルが焼き切れていた。

堪えきれず押し倒されたドアの向こうから、ガスマスクはわんさとなだれ込んで来る。エレベータは上層と跳ね上がっていった。再び開いた扉に唾然とする。

エレベータの蛇腹扉が下りるのが早かったのか、そんな船賊たちが室内へなだれこんでくるのが早かったのか、もう分かったものではない。ただ男を最後に格納すると、エレベータは上層と跳ね上がっていった。再び開いた扉に唾然とする。

「やだ、なにこれ」

我先にとエレベータを降りたそこに、『ミルト』フロアは広がっていた。その中でも外周をグルリ取り囲む言語カウンター、その内側に放り出されていたのだ。

「奴ら、上がって来るつもりだぞ！」

どうやら飛び込んだあの部屋は、言語ブースごとに備えられた従業員の控え室だったらしい。今さら腑に落ちるも我に返らせて、毛むくじやは教える。

蛇腹扉を閉じようとしているエレベータが、間違いなく下層から呼び戻さようとしていた。

すかさず男がそんな扉へ転がっていたワゴンを挟み込む。

だがエレベータはこの言語ブースにのみに設置されているわけではない。扉の動きは延々左右へ伝播すると、あつという間にカウンターの四分の一ほどを埋め尽くしていった。

「い、一体、何をすればこんなことになる。あなたは相当の悪党か！」

見回した毛むくじやらが、後ずさっている。

「何にも覚えがねえから、逃げてんだよっ」

吐き捨て男がステップを踏んだ。

「とにかく向かいのゲートまでだ。走れッ」

飛び乗ったカウンターの尻で滑り越える。

「簡単に言ってくれるな！」

「待ってっ！」

毛むくじやらがその後につき、置いて行かれまいとネオンもならう。背で、逃すものかと動くエレベーターはピストン移送だ。カウンター内へ次々と、船賊を二体一組で吐き出していった。なおのこと逃げ足に火がついたことは言うまでもなく。フレキシブルシートが散らばり、黒煙を立ち上らせた言語カウンターに、焼け焦げた利用客の山がゲート前を塞ぐフロアを突っ切る。

はずが、それはちようどフロア中央へさしかかった時だ。

体は空を切っていた。

「ウ、ウソっ！」

慣れ親しんだハズの一G環境下は変調をきたすと、周囲で撒き散らされていたあらゆる物さえふわり、宙へ浮き上がらせてゆく。

「マズいぞ！」

腕を振り回してバランスを取る毛むくじやは、つまり状況を理解していた。巨大

なコロニーの疑似重力装置からでは考えられないスピードで始まった重力解放だと、眉間に生えたテグスのようなひげを逆立てる。

おかげで当初のロケットダツシユの効果はてきめんだ。エネルギー保存の法則と、今や誰も体は制御不能と飛ぶようにフロアを移動している。まさに、中央に高く設えらえた円形ステージへ激突した。

「掴めッ」

跳ね上がる体はまるでスローモーションで弾け飛ぶピンとなり、辛うじて背を反らせた男の手がステージのへりを掴んでみせる。もう片方の手を、ネオンへ伸ばした。掴めと促されたなら、もう遠慮などしておれない。握りしめてネオンもまた、毛むくじやらへ足を突き出す。その足を毛むくじやらが掴んだところで、互いに互いを引き寄せ合った。有様は前衛オブジェか。まさに首をひねる。ならこの低重力を無視して床を蹴り、船賊たちは駆け付けようとしていた。

「ありや、軍の装備だろッ？」

男の声が裏返る。

「どういうことだ。船賊ではないのか！」

「聞きたいのは、こっちだっつーのッ」

「言ってる場合じゃないでしょっ！」

その動きはとにかく機敏だ。比べたなら、どうにも逃げ切れそうな気がしない。

と、ステージへかけていた手が滑りかけた。咄嗟にアルトは掴みなおし、目にしたそれに眉間を詰める。

ススだ。

こびりついていたせいで滑ったようだった。

とたん天井へ飛んだのは視線となる。見据えた両眼に、みるみる力はこめられていった。

「お前ら、俺に掴まれッ！」

言って両手で、スタンエアを強く握りしめる。銃口を、床へ向けた。

見て取った瞬間、すかさず手繰って女を小脇へ抱え込みなおしたライオンは、懸命と言えよう。

「ええい！ 本気か？」

そう、ここはつまり二度発目の落雷ポイントだ。だからしてあけられた穴は今、頭

上にぼっかり口を開いていた。

「本氣って、え、何っ？」

ついてこれない女だけが疑問符を連発させている。

放ってライオンは、アルトの作業氣をしつかり握りなおした。

「下だの上だの、あなたにはついてゆけんな、まったく！」

「そのうち慣れるつてのツ」

迫る船賊たちは抱え上げたスパークショットの電極を、ふたたびさんにんへ向けている。

「離すなよツ」

「もちろんだ！」

「待って、何っ！ どうなるのっ？ せ、説明してっ！」

かまわずアルトは、スタンエアのトリガーを絞った。

吐き出されたエア弾はロケット噴射となり、とたん体は跳ね上がる。

「ぎゃあっ！」

追加してさらに数発。

女の悲鳴を引きずりながら一直線に天井へ駆け上る。

空けられた穴をくぐり抜けた。

さらにこれもくり貫き『ミルト』フロアへなだれ込んで来た痕跡らしい。断熱シートを、やたらと分厚い三枚目の隔壁を、次々に通り抜けてゆく。あつという間に、巨大な筒状の空間へ抜け出していた。

薄暗いそこが巨大な筒だと判断したのは、周囲に一定間隔で取り付けられた作業灯らしき明かりからそのような形状を想像したからだ。おかげで、それまで感じていたスピードは突如、ゆったりしたものへすり変わっていた。

覚えた余裕に、追手がついていないことを確かめる。

が、巨大といっても所詮は限りある閉鎖空間に違いなかった。終えたところで、すかさず現実を知らされる。筒の外壁だ。頭上を塞ぎ浮かび上がった。同時に舞い戻るのは冗談かと思うほどのスピード感にはかならず、そこにこれまでほぼ垂直に連なっていた船賊の侵入口こそ見当たらない。頭上へ振り上げるスタンエアを、躊躇している暇はなかった。

「そろそろ止まるぞ。覚悟しろッ」

「ウ、ウソでしょっ！ 後先、考えてよっ！」

もっともだが、うなずく代わりだ。アルトはトリガーを絞る。見えない力が両肩を

突き返し、確かとスピードは緩んだ。が、減速したのはアルトだけだ。ライオンの体はそのままアルトを追い越し飛び上がってゆく。掴んだ作業着を裏返し、頭上にまで跳ね上がった。引つ張り上げられアルトは回転し、同様に逆立ちする格好となった女の体が抱え切れなかったライオンの腕から抜け出してゆく。悲鳴と狼狽の声は体勢そのもの、もつれにもつれ、頼りなく宙をかいて前後不覚。真ただ中でさんには外壁にぶち当たった。

だというのに跳ね返らない。体は格子状になったそこへ、なぜにや吸いつけられる。なら重みに耐えかねたか、やがて格子はガタリと外れた。

「わっ」

「お」

「なんだッ」

足元をすくわれたような感覚にこだまする、それぞれの悲鳴。照明ひとつない空間を、さらに奥へ吸い込まれてゆく。

果たしていかほどの距離を移動したのか。縄と編まれたコードの収まる細長い一角に縦一列でフン詰まってようやくく、その動きは止まっていた。

はずが、容量オーバーだ。片側はぱっくり開いて放り出される。遠ざかる視界に、

共に放出されたコードの束が映り込んでいた。開いたパネルもまた、片側を固定したきりで揺れているのも目にする。

その左側、触れるほどの距離に壁はあった。

右側、遠方に、救命具を吹かせて行き交う利用者の群れもまた、見つける。

なら、ここはいったいどこなのか。至極単純な疑問は浮かび上がっていた。だからしてアルトは認識の速度を速めるためにも、この空間における重力下での上下を把握しなおす。行き交う利用者に合わせ宙を泳ぐコードを掴むと、スタンエアの銃身で壁を押しやり、体を回転させていった。

比例して視界に掛けられてゆく、なんともものんびりとした補正。

見覚えのなかった光景は果てに、よく知る場所へとその姿を変える。

「ここ、発着リングじゃない……」

女が呟いていた。アルトを掴むと、自身も体を同じ向きに固定しなおしている。だからして目の前には天へ反り上がる巨大な通路が伸びていた。

「助かった、と言いたいところだが、だとしてこれは何の騒ぎだ？」

おっつけ二人の視線に己が視線を沿わせたライオンも言う。

確かにエアロックサインはせわしなく点滅し、発着リングは格納庫へつながるゲー

トへ利用者を殺到させていた。船賊の襲撃を受けているからとはいえ、振り切ったと思しきラバースーツは周囲に一体もおらず、こうまでなるパニックの理由が飲み込めない。

と、答えあぐねて眉間へ力を入れたアルトの脇腹を、女がつついた。

「ね、ちよつとアレ何？」

その指は、通路の向こうを指している。

なぞりアルトはのぞき込んだ。首を傾げていったなら、背後でライオンも同様に身を折つてのぞき込んでみせる。なら反り上がった通路を塞いでドミノ倒しの勢いだ。駆け下りてくる気密隔壁は映り込んでいた。

「もう駄目だ。今度こそ、駄目だ！」

呻くライオンがたてがみを、減重力になお逆立てていた。

「こつ、こんなことしてる場合じゃア、ないぞツ」

つまり事態はどうあつても、一休みさせてくれないらしい。光景は、利用者の命よりも周辺海域の保存を優先させる場合にのみ起こる、気密隔壁の超法規的動作だった。そう、アルトをはじめ、ジャンク屋が乗り込む放置コロニーや無人船は、たいてい事故をきっかけに放置されたものである。そうした事故の中には、周辺へ回収不可能

なほどのゴミを撒き散らすものも多く、それらゴミは移動していきようが静止していきようが、航行中の船にとつて最大の脅威と疎まれてもいた。機密隔壁の超法規的動作は、それらゴミとの衝突で引き起こされる船舶事故を最小限に食い止めるための最終手段だ。

したがってその動作が目の前で起こっている今、『フェイオン』が危機的状況下に置かれていることは明白だった。目下のパニックも当然と腑に落ちる。

「あんたの船はどだッ？」

アルトはライオンへ声を張った。

「だからなんなのよっ、アレっ！」

無視された女が繰り返す。

「ここへ吸い上げられたのは、致命的な機密漏れがあつたからつてことだよッ」

「ダメだ。わたしの船は逆サイドのリングだ！」

並ぶ格納庫ゲートの造語ナンバーへ目を這わせていたライオンが、舌打った。

「な、なによっ、それーっ！」

女が叫び、すかさずアルトは女へも確かめる。

「あんたはッ？」

「帰りの船はモバイロしか知らないのっ！」

「仕方ねえッ、おまえらついてこいッ。俺の船は四ブロック先だッ」

否や握ったきりのスタンエアを、ドミノよろしく空間を遮断して押し迫る隔壁へ突きつけた。それだけで事の成り行きを理解するあたり、ふたりの呼吸はもう阿吽だ。作業着を引つ掴まれて、アルトはトリガーを絞る。

乾いた発砲音が、逃げ惑う利用者の悲鳴に重なっていた。助走いらずのトップスピードだ。救命具を吹かせて逃げ惑う利用者の誰より早く、天井際を滑走する。全開の隔壁一枚目をやり過ごし、間近で動き始めた二枚目をすり抜ける。半ば閉まりかけた三枚目をかわし、辛うじて四枚目、隔壁の間から目指す区域へもぐりこんでいた。

銃身をブレーキ代わりにして、天井へ擦り付ける。

減速に伴い判読可能となった格納庫ゲートの造語ナンバーへ、ライオンが懸命に視線を走らせていた。

「何番だ？」

「『一二六四八』を頼む」

と、その時だ。女は不意に、アルトの体を突き放す。

「おいッ」

「後でっ！」

答えるだけで精一杯だ。ネオンは忘れまいと、耳にした格納庫番号を頭の中で繰り返す。身をひねりつつ伸び上がって天井を蹴ると、方向転換を試みた。

なにしろそれが偶然なのだとすれば、なおさら放つてはおけない光景はそこにある。そうして目指す場所にはバツ印前で会った『デフ6』のデミが、ぶかぶかの救命具を着込み立っていた。しかもゲートはデミのかざす乗船チケットに、無反応を決め込んでいる。

『デミっ！』

流れる利用者の川を横切り、到着した格納庫ゲート上部へネオンは手をつき声を張り上げた。

『おねえちゃん！』

驚き持ち上がったデミの顔には、昇降機の説明を要領よくこなしていたあの面影など微塵もない。壁面を手繰り、ネオンはデミの元へ降下してゆく。鼻溜を振ってデミは、とたんネオンへまくし立てた。

『もう、出ちやったよ！ あの後、ミルトに船賊が押しかけてきて！ システムがダウンしたから就労ゲートが使えなくなつて、ぼく、こつちへ回つて来たんだ。なのに！』

過呼吸気味に、そこで一度、言葉を切る。

『ひとり？』

ならばとネオンはデミの目線にまで膝を折つた。ゆっくり問いかけてやる。またもや何かを口走りかけたデミが、こらえるように鼻溜を縮ませていた。問いにただ、コクリとうなずき返す。が、やはりこらえきれなかつたらしい。

『でも、おかしいよ！ 船賊なのに軍みたいな装備……！』

遮つて、ネオンは自分の口元へと人差し指を立てた。

『一二六四八。船』

あえてデミへ微笑みかけると、忘れまいと繰り返した格納庫ナンバーを口にす。とたんデミの目は、大きく見開かれていった。

『乗れるの？』

もちろんネオンにその約束はできない。だが、ここへ来たからには否定するわけにもゆかなかつた。だからして答える代わりだ。デミの手を取り立ち上がる。一刻も早

く、と進行方向を睨みつけた。

瞬間、そんなネオンを襲う事実。探して並ぶゲートへ視線を這わせたものの、ネオンに造語文字は読めなかった。

『ぎゃーっ。『一二六四八』って、どれよっ！』

思わず悲鳴は上がる。ならそんなネオンの手を、デミが引いていた。

『それなら、この七つ向こうだよ。おねえちゃん！』

さすが造語マスター。果たして現状、助けているのか助けられているのか。ともかくデミの嘖かす救命具の推進力を借り、ふたりは濁流と流れる利用者の中に混じりゲートへ飛ぶ。

前で、ブロックを密閉して気密隔壁が完全に閉じていた。行き場を失った利用者はとたんあふれかえり、ダメ押しと歪んで気密隔壁がミシリ、音を立てる。

光景に少なからず寒気を覚えたなら、ちようどその手前だ。男と毛むくじやらの姿を見つけていた。隔壁の稼働と共に熱煙シャッターは切れていたらしく、代わりに格納庫とを隔てて塞ぐ鉄扉へしがみついている。

『あのヒト』

めがけてネオンは指をつきつけた。

頷いたデミが、片手で救命具の噴射を絞と、断続的にかける逆噴射で減速を試みる。感じ取ってネオンは一足先にと、デミの手を離して慣性のままに、ふたりの元へと滑った。

「何っ？　ここまで来て、今度は開かないわけっ？」

「なら、あんたも手伝えつてのッ」

男に怒鳴り返される。

「もーっ！　トラのバカっ！」

もたもたしていられそうにないなら、叫んでネオンも鉄扉へ食らいついた。追いつきデミもそこへ加わる。

とたん鉄扉は歪んで引つかかっていた一部分を乗り越えようと、勢いよく外へと開いた。鉄扉に食らっていたそれぞれの体は、勢い余って格納庫へ放り出される。

「おい。何だ、そいつ？」

いうまでもない。いつの間にか増えているデミのことだ。ネオンは、素っ頓狂と響く男の声を聞いていた。

「デフ6のデミよ。わたしの助手。だから一緒に乗せてちょうだい」

いまだゴムまりのように跳ねるデミの体を引き寄せネオンは、毅然と返す。

ようやくつま先で床をとらえた男の目が、しばし瞬きを失い張りついた。

「手続きは、わたしが済ませるぞ！」

傍らから毛むくじやらが格納庫の隅、設置されている管制端末へ身を翻してゆく。

「まかせた」

我を取り戻したように答えて男は、ネオンへ向きなおった。

「言っておくが俺の船は観光船じゃないぞ。そこんところ、わかってんだろうな、あんたツ」

「そんなガラじゃないことくらい、もう十分わかって頼んでんのよっ！」

「それにそいつ、まだ子供じゃねえか。こっちはヘタすりや、奴らに拿捕される可能性もあるんだぞ。それも承知で頼んでんだろうな」

振り回すその手には、スタンエアが握られたままだ。見て取ったデミが、ネオンの影へ隠れるようにしがみついてくる。

「だからって……」

そんなデミをネオンはかばう。

気づいて男が、スタンエアを背中へ戻していた。

「ここで放って行けるわけないでしょっ！」

向かつて言い切れば、理解できない言語でもめる双方を見上げるデミは、すっかり怯えてしまっている。

男の目が、そんなデミをとらえていた。それこそ答えかねてヤケクソ紛れか。頭をかきむしつてみせる。

「つたくツ」

やおら突きつける指で、ネオンの背後をさし示した。

「だったら、後ろの鉄扉、ふたりに閉めてハツチへこいッ！」

それきり床を蹴りつけ船へと飛ぶ。

見送つたなら、ネオンの頬は緩んでいった。

『扉、閉める。船、乗ろう！』

ままにデミを誘う。

従うデミが、ともかく救命具の残りを噴かせた。助走をつけると、ふたりがかりで鉄扉へ飛びつく。一度、開いた鉄扉だ、閉めるにあたっては思った以上に簡単だった。すませてふたりは再び滑り戻る。意気揚々と、これから乗り込むべく男の船を見上げた。いや、見上げたつもりで広い格納庫内、目を泳がせた。やがてそこに、こぢんまりうずくまる華奢な一機のスクーター船をとらえて絶句する。

「ウソ……」

だいたいスクーター船と言えば、衛星間移動のために用いられるチョイ乗り感覚の軽船舶だった。目の前の船はそれを誤魔化すかのように船尾ヘカーゴモジュールを後付けし、船体中央部に居住モジュールを増設していたが、ヒトなら定員も一、二名。光速への乗り入れさえ許可されていないシロモノに変わりは無い。今更ながらここへやってこれただけでも奇跡の命を、この船に預けるのか。ネオンはひたすら愕然とした。

知っているのだろうか。デミも心配そうだ。足元から頼りなさげに、ネオンを見上げている。その目と目が合った。だとしてネオンに返す言葉などありはしない。ただただ奥歯を鳴らすと、なにはともあれ自らの説得にとりかかった。

「贅沢……、いつてられないのよ」

デミの手を取る。搭乗ハッチは、アクリル製のらしいドーム状のコクピットが突き出る船首と、居住モジュールの間にあつた。見定め床を蹴りつける。

先に船へ向かった男は、船体に接続されていた充電ケーブルと燃料チューブを外し終え、伝い降りたハッチ前で船のキーを脇のスリットへ差込んでいるところだ。やがてガルウイングよろしく跳ね上がったハッチ前から、滑り来るネオンとデミへ振り返

った。早くしろ、とその手を大きく回して振る。離れた位置でも、手続きを追えた毛むくじやらが管制端末を乗り越えて、船へ向かつて身を滑らせ始めた。

包み込んでそのとき、追いつて格納庫全体から獣の遠吠えにも似たような重苦しい音は鳴り響く。

「ぼやぼやするなッ」

不安に駆られ、滑りながら辺りを見回すネオンとデミの体を男がひっ掴んだ。力任せと船へ放り込んだなら、辿り着いた毛むくじやらがその後ろから乗り込んでくる。見届け男が中へと身をひるがえした。その足元からデミが、脱ぎ去った救命胴具を船の外へ投げ捨てる。飛び行くその先で鉄扉は、受けた重みに耐えかねボンツ、と中央部をへこませていた。決別して、男は船のハッチを勢いよく閉める。

空間が密閉されただけで覚える安堵感に、つかの間、張り詰めていた空気が緩んだことは否めなかった。しかしながら浸るにはまだ早く、拒み男も先を急かす。

「こつちだ」

ハッチの真正面から伸びる急勾配の階段を、手すり伝いに上層へ滑り上がっていった。

「スタータは？」

追いかけて毛むくじやらが問いかける。

「エブランチネル」

おっかなびつくりだ。聞きながらネオンもその後に連なり、その後をデミが追いかけた。

「マニユアル通りなら、立ち上げくらいなら手伝えるぞ」

「頼んだ。コクピットは突き当たりを上だ」

答えて男は毛むくじやらを、登り切った所に横たわる通路を左へ押し出す。

「あんたらは、こっちだ」

上がってきたネオンとデミを、右へ振り分けた。

「ちよ、ちよつと！」

それこそ突き飛ばされてネオンとデミは、通路を一直線と飛ぶ。あつという間に狭い船内を突き当たりまで、滑走した。なら触れたセンサーにドアは開く。くぐり抜け、立ち塞がるモノにぶつかり動きを止めた。押し返したネオンは辺りを見回す。自然、表情は険しくなっていた。

「何よ、コレ」

そう、目の前にあるのは、上下を天井と床へ固定したネットだ。しかも中には見慣

れぬ物が包みこまれている。同じようなものは空間を埋め尽くすと、規則正しく無数とそこに並んでいた。

「向こうはふたりで一杯なんだよ」

男の声に振り返る。

「わあらおう」

その足元から何事か叫んだデミが飛び出していった。

「ちよつと待ちなさいってっ!」

止めるがもう遅い。デミの姿は乱立するネットの中へ消えてなくなり、仕方なくネオンは男へ顔を向けなおす。

「……ここ、カーゴモジュールね」

確信したままを口にした。

「ご名答」

あつげらかんと答えて返す男は手を、天井へ伸ばしている。

「ついでに言わせてもらおうなら、このカーゴは精密機器向けで、耐震、抗G仕様の特注品だ」

そこから一気にフックを引きずり下ろした。フックにはロープ状のものがつながら

ており、引き出されるや否やそれはネット状に広がると、男はそれを水面へ網でも打つかのようにネオンへ投げる。

「な、何、するのよっ！」

暴れようが剥ぎ取れる範疇になかった。ものの数秒でネオンはネットにくるまれ、天井へ吊るし上げられる。

「だから言ったろ。観光船じゃないってッ」

最後、屈み込んだ男が床へ、フックを固定していた。

「あいつ、どこへ行きやがった？」

その目を辺りへさ迷わせる。

「だからって、これは聞いてないっ！」

聞く耳持たずでネットの間へもぐりこみ、戻ってきた。その肩には、デミが担ぎ上げられている。

「ここが一番安全なんだよッ」

言って違わず、ネオンの隣に固定した。並んで吊られたその姿は、まさに捕獲された二匹の野生動物だ。

「とにかく、ここでおとなしくしてろ。落ち着いたら後でちゃんと出してやるから」

「そう言う問題じゃないっ！」

だが聞く耳持たず。男はドアへ踵を返している。もう押し止めて言うなら、これしかなかった。

「そんなシユミなの、このヘンタイいつ！」

とたん、スライドしたドアの向こうで振り返った男のこめかみが痙攣するのを見る。

「おま……ッ、一言多いッ」

それきりドアは閉じられていた。

同時に明かりが待機電源へ絞られる。暗がりだが、すっかりネオンの勢いを削いでいた。

「……だから、なんで移動するたびあたしは、荷物扱いなのよ」

うなだれたところでサマにもならない。

と、そんなネオンを励ましたのは、あろうことか先ほどまで心配げな瞳でネオンを見上げていたデミだ。

『心配しないで！』

言う声は異様なほどに明るかった。

『だってこれ、ジャンク屋の船だもん！』

ネットにくるまれた体をネオンは、デミへひねる。そこで意気揚々、鼻溜を振るデミは自慢げにさえ見えていた。

『驚かないで、おねえちゃん！ ぼくたち今、そのジャンク屋がお宝を保管するカーゴにいるんだよ！』

「そ、そうなの？」

ネオンが間の抜けた返事をしようが、デミは興奮気味になおもたたみかける。

『あのね、おじいちゃんは、よくぼくに教えてくれたんだ。ジャンク屋は何より飯の種になる回収品を大事にするって！ だから彼らの船の中で一番安全なのは、コクピットでもどこでもないカーゴなんだって！ それにお宝探して既知宇宙の端から端まで飛ぶジャンク屋の船は、見かけで判断しちゃいけないってことも言ってたよ。奴らの船と腕は信用するに値するって。でなきや、ジャンク屋なんかやってけないから！』
勢いに押されてネオンはうなずく。

「そう、そうなんだ」

だが、その説明だけではどうしても拭えない疑問は残る。

『どうして、デミ、ジャンク屋、分かった？』

問いかけたなら、デミの明かすカラクリはこうだった。

『そっか、ぼくまだおねえちゃんに、サポジトリへ行ってるコト、言っでなかつたもんね。ぼく、その物理理光素学部（リョウソゴブ）の六年生なんだ。だからこの緩衝ネット（クワンソクネット）に包まれてる物の価値、全部わかるよ！ みんな二年生の時、教科書で習った理論が応用されてたよ。奥にはね、マニアならすごいお金だしちやうのもあつたよ。ぼくだって研究材料に欲しいくらいだもん！ そんなの積んでるなんてさ、博物館か、ジャンク屋の船くらいだもん！』

『フエイオンのスタッフ？』

昇降機を修理していたあの姿を、いまさらのように思い出す。

『ああ、えつと、あれは帰り際にたまたま頼まれただけなんだ。ホントは擬似重力と内圧の開放過程における光粒子波形の変化についてレポートを書くためここへきてたの。だって学校の機材じゃ足りなくて、既知宇宙でも一位、二位の規模があるフエイオンの重力装置なら納得のできる結果がだせるんじゃないかって思ったんだ』

『ぎじゅうりよく、の、こうし、れぼーと？』

言い切れず、ネオンの口は開いたままで止まっていた。だがデミはまだ言い足りないらしい。

『うん。だってぼくの将来の夢は……』

この修羅場で浮かべる満面の笑みは、とにもかくにも無邪気だった。

『おじいちゃんのお店を継ぐこと！』

瞬間、ネオンはどこか遠くへ来てしまった感覚に襲われ、深く両目を閉じてゆく。

「あんたが一緒に、助かった」

船首、突き当りから上へ伸びるハシゴを手繰り、アルトはコクピットへ出ていた。

一足先にもぐりこんでいたライオンは、半径三メートル足らずのアクリルドーム、その中央に据えられた座席で、息を吹き返した計器類の淡い光を見回している。

「驚いた。ただのスクーター船だとばかり思っていたのだが」

アルトへ振り返るなり驚嘆の声を漏らした。

「仕事柄、ちんたら飛んでたんじや、儲け損ねるんでね」

身をすり合わせるようにして、そんなライオンと場所を入れ替わる。背から剥がしたスタンエアを座席側面に張り替え、アルトはオーダーメイドの座席へ体をはめ込んだ。背負い込まんばかり、四点ベルトを締め上げてゆく。

「だがスクーターでは光速には乗れんだろう？」

手際の良さを眺めるライオンが問うていた。

「乗り入れが許可されていないのは、サイズに問題があるからじゃない。その点、こいつは大型船舶と同じスペックだ。相当の使用料も払ってる。船種詐称だつて文句を言われる筋合はないね」

交互にフットペダルを踏み込み動作を確認しつつ、アルトは片手間と答えて返す。続けさま、左手スロットル脇のコンソールを弾いた。ならどうやらついにその術を覚えたらしい。

「で、あのふたりはどうした？」

相変わらずのやり方を聞き流下ライオンが、質問を切り替えていた。

「カーゴなら問題ない」

高速運転に伴い動力部が、風を切るような高音を発し始める。船尾で、歪んだ鉄扉を覆い隠すようにエアロックが閉じられていった。

「それは名案だな」

伴い管制からコロニー周辺の航路状況が送信されてくる。それまで無色透明だったアクリルドームへ、ホロ映像の膜は青く広がっていった。出航してゆく機影と、その予想軌道が幾重にも重なると、アルタイムで表示され始める。しかしながらそこに安

定した抜け道こそ、見当たらない。我先にコロニーを飛び立つ機影の予想軌道はひたすら混沌と絡まって、アルトの視界を埋め尽くしていった。

察したライオンが、周囲へ両手足を突っ張る。

「ただでも込み合うエリアだというのに！」

身構えれば、閉まりきった後方エアロツクと連動して、真正面の格納庫扉が開きだす。が、生じた歪みが原因か。三分の一も開いたかどうかというところで動きを止めていた。

刹那、管制からの情報が途絶える。

アクリルドームを砂嵐が覆った。

即座に見限ったアルトの手が、素早く自前のナビを立ち上げる。だが管制との連携上、ここはジャミング防止措置が取られた場所だ。外の様子を知ることではできず、立ち上がったナビはひたすらここ格納庫だけを表示し続けた。

「いいたかないが、俺たちや、よっぽど嫌われてるってワケだ」

「このどきくきに紛れて、わたしを仲間に入れてくれるな！」

吐き捨てるアルトのその背で、すかさずライオンもまた言い放つ。

「そいつは、失礼」

笑って覚悟を決めていた。アルトはスロットルを握りなおす。膝下のスターターをワンプッシュした。

風切る駆動音へ低音が、膨れ上がるように重なってゆく。あわせてスロットルを絞れば船体は、ゆるゆる上昇を始めた。マタドールに立ち向かう闘牛のごとく、闘志もあらわと右へ左への横滑り、わずか開いた格納庫の隙間から表の修羅場を睨みつけた。

「吹き飛ばされんなッ」

同様に見据えてアルトも軽く唇を湿らせる。

応えて無言でライオンがうなずきしたのが合図だった。操縦桿を傾ける。

船体が滑り出していった。

同時に、フットペダルを蹴り上げる。

やおら船体は縦へ九十度、回転。

そのままでは潜り抜けられなかった半開きの格納庫の扉の間を、小ぶりなスクーター船ならではの、すり抜けていった。

とたん視界は広がる。

大小様々の船がアルトの前に、もんどりうって交差した。反応するナビがアクリル

ドーム一杯に映像を展開し、ぶちまけられて機影は次々、投影されてゆく。見る間に絡まる軌道が周囲を塗りつぶし、その中でも急速に接近してくる数機をマークすると、はなから最大ボリュームで警報を鳴り響かせた。

一手に引き受けたなら待たなし。

今一度、アルトは逆足のフットペダルを蹴り上げる。

見つけたばかりの抜け道へ、迷わず船体をもぐりこませた。

くぐり抜ければ息継ぐ暇なく左展開。右舷から突っ込んでくる他船をかわす。

かわしても立ちふさがる軌道の網へ、次なる突破口を探して目を走らせた。なら誘って固く結ばれていた予想軌道はほどけると、そちらへアルトは船体を落としこむ。

唐突とせりあがつてきた鉄塊に、否応なく心拍を跳ね上げた。

崩壊しつつある『フェイオン』の残骸だ。あまりに周辺が混み合い過ぎたせいで、

ナビが処理しきれなかったのに違いない。思うが慌てるあまり、大きさも距離もうまくつかむことができなかつた。まさにアルトは逆噴射を敢行する。つまり火事場のクソチカラだ。勢いに踏ん張りきれなかつたライオンが、コクピット内をどこぞへ吹き飛ばされていた。そのさらに奥で、思い切りシェイクされた居住モジュールもまた、けたたましい音を立てている。かまわず抜けるほどの勢いだった。アルトは左フット

ペダルを踏み込む。ライオンと船体から上がる悲鳴を聞きつつ、吹き飛ばされたような左展開で、せり上がってきた残骸を船体の腹へ押しやった。

その大幅な減速に、周囲の予想起動は瞬時にして組み替えられてゆく。

新たに編まれた軌道の穴へ、アルトは手足総動員で船首を振り上げさせた。

くぐり抜け、何機もの他船をかわし、優雅に航行する超巨大観光船を盾に、ようやく閑散とし始めたエリアへ抜け出す。

やがてそんな超大型観光船とも軌道を分ければ、あれほど鳴り続けていた警報音はそこでピタリ、止んでいた。絡まる軌道のほどけたあるクリルドームに、瞬きを忘れた星がごまんと張りつく。死を連想させる静寂を、そこに深く漂わせた。

実感するまで、どれほど時間をかけたかしかない。

浅い呼吸を繰り返し、アルトは引き剥がすようにしてスロットルから手を離す。

まさにぐったり、オートパイロットのスイッチを弾き上げた。

計器から光が落ちる。代わりと灯る白色灯に辺りは平らと照らし出され、同時に働き始めた簡易重力が、その足を久方ぶりの地面へ下ろした。

感じた安堵に自然と腹の底から息はもれ出す。

背後でそのとき、鈍い音はしていた。食い込んでいたベルトを外してアルトは急ぎ、

振り返る。なら音の原因はそれだったらしい。ライオンは、そこで上下逆さどひっくり返っていた。

「お、おい、大丈夫か？」

かける声も、おずおずとなつて然り。ならライオンも、こう答えて返す。

「ちようど、慣れてきたところだ」

思わず笑いはこみ上げていた。

「あんたにしちゃ、上出来だ」

歩み寄つて手を差し出していた。掴んでライオンが正しい上下を取り戻す。放心したように、しばしその目を泳がせた。

「……助かったのか？」

「船賊も、ついてきてないようだしな」

質問が上等すぎて、アルトは肩をすくめて返す。

「一生分の運を使い果たしたつてところだ」

つまり今度は、ライオンが吹き出す番となつていた。

「なるほど。ならば、残りは実力で切り抜けるとしよう」

腰を上げ、自らの体へ目を落とす。

「なんてありさまだ」

確かに発色のよかったオレンジ色のツナギは今や、ススと得体の知れない流動食に塗り固められて見る影もなくなっていた。無論、二発目の落雷で飛び散ったあれやこれやを頭から被ったアルトなど、それ以上のいでたちだ。

「悪いが、ランドリーなんて気の利いたものはないぜ」

脱いだ作業着を座席へ投げつつアルトは、体を階段へ傾ける。

「どこへゆく？ メッセージは聞かないのか？」

気づいたライオンがツナギから顔を上げていた。

「カーゴへ行ってくる。後回しにされたことがバレたなら、噛みつかれそうだったんでな。メッセージはその後だ。何かあったら下層の一番奥にいる」

上がった時、鳴ることのなかった靴音が小気味よく鳴っていた。響かせアルトは、振った手で進行方向を指し示す。その手が吸い込まれるように下層へ消えたなら、取り残されてライオンは思わずヒゲをヒクつかせていた。

「……冗談じゃない。まだ、何か起こるとでも言いたいのか？」

ドアがスライドしてゆく。相当に揺れたことを示して灯る明かりが、カーゴ内に渦巻くホコリを照らし出していた。払いのけたアルトはその奥へ目を凝らす。

「死ぬかと、思ったわ」

地を這うような声に呼び止められて、ぎよつとしていた。見れば目の前だ。並ぶネツトの中に恨みのこもった三白眼は浮かんでいる。

「お、驚かすなよ」

取り繕って、急ぎフックへ身を屈めた。外そうと手をかければ、ネットを揺する女がそれを拒む。

「あたしじゃなくて、隣が先でしょ」

仕方なく、デミと紹介された『デフ6』のフックへ先に手を伸ばすことにしていた。外せば張力を失ってネットは解け、かき分け中からデミは勢いよく飛び出してくる。続けさま女のフックをはずしにかかれば、ネットに絡まりながら雪崩れるように女は床へ吐き出された。

「い、つたあい……」

「おいおい、その勢いで大事な商品に傷、つけてくれんなよ」

「だったら今度から、ちゃんと座席、用意しておいてよね」

打ち付けた尻をさすりつつ、唸つて女は立ち上がる。仕事を終えたネットもまた一本のロープへ戻ると、アルトの手から天井へ吸い上げられていった。

「そいつはよれよれの爺さんになつて、観光遊覧船の船長にでも転身したなら考えておいてやるよ」

「あらそう。楽しみにしてるわ。それはそれは豪華なシートで遊覧してくれるんですよ。代金、弾まなきや」

「誰が恵んでくれと言つたかよ」

言われように、アルトはけつ、と吐き出す。

とその視界へ、女の手は伸びていた。意味が分からずアルトはしばし、その手を見つめる。

「だけどデミのいつてたことはホントだったみたい。ジャンク屋なら大丈夫だつて。ともかくありがと」

辿つて持ち上げた視線の先に、柔らかい笑みはあつた。

「あたしはネオン。言つとくけど、これ皮肉じゃないわよ」

小ざかしくも翻弄されたなら、アルトはひとつ大きな息を吐き出す。

「アルトだ。礼は素直に受け取っておくよ」

呆れ半分、その手を握り返した。

『ね、ジャンク屋なんでしょ？ おじさん、ジャンク屋なんでしょ？』

ほどいたそこへ、デミの頭は割って入る。

「ぶら下がってるガラクタを見るなり、この子があたしにそう教えてくれたの」

見やったネオンが肩をすくめてた。

『ね、そうでしょ？ ジャンク屋なんでしょ？』

繰り返すデミは『ヒト』語が聞き取れないらしい。

「ガラクタって言うな、ガラクタって」

『だったら、どうした』

ネオンへ『ヒト』語で返し、アルトはデミへ造語をつづった。

『やっぱりそうなんだ！ ぼく一度、ホンモノのジャンク屋に会っておきたかったん

だ！』

「とにかく、ずっとここにいろなんて言うつもりはない。表へ出るぞ」

目を輝かせてデミはまといつき、蹴散らしアルトはドアをスライドさせる。とはいへ行ける場所など限られていた。居住モジュールへ向かう。たどり着いてドアを開き、覗き込んで即、閉めた。先ほどの逆噴射のせいだ。使えやしない。仕方なく、その足

をコクピットへ向けなおした。

『ねえ、ねえ、だったらばく、確かめたいことがあつたんだ』

道中、前へ後ろへ絡みつくデミは器用なものだ。

『だって授業と実際じゃ、違うんだもん。ね、ジャンク屋つて基礎理論には詳しいんでしょ？ でないとお金になるパーツを見極められないんだもん』

その視線を避けきれない。

「おい、こいつ、本当にお前の助手なのか？」

見下ろしてからネオンへ振り返った。

「えっと、そうねえ、十分だけ、かな」

「ああ？」

「機材のメンテナンスをしてくれたの。そこで知り合っただけで……えっと、なんだっけ？ サポジトリつてこの物理なんとかつて学生さんだつて、さつき聞いたわ」とたんアルトの声はひっくり返る。

「サポ？ なんだよ末はギルドか学者さんつてヤツか？」

おかげで言うべきことは定まっていた。アルトはコクピット前の階段で足を止める。デミへ目線を合わせてヒザを折った。

『あのな、ぼうず。だったらひとつ教えておいてやるよ』

待ちに待った講義の予感に、デミの鼻溜は期待に膨らんでいる。

『この船に乗り合わせたのは仕方ないとしても、本当のおりこうさんてのはワケのわからねえ話に首を突っ込まないもんだ』

聞き入る様は、師匠からの大事な言葉を受け止めるかのようで、ままに大きくうなずき返した。さらに何が聞けるのだろう。アルトへ真摯な眼差しを向け続ける。

つまり、伝わっていなかった。

しこうして沈黙は訪れる。

『あのな、俺のいいたいことは、少しはその鼻溜を閉じてろってことだッ』

耐えかねアルトは立ち上がった。

『バカね。子供相手に何、脅してるのよ』

見る間に鼻溜をしばませたデミを、ネオンが見逃すはずもない。

「勘違いしてんのは坊主の方だろ。こいつのために言っやってやっつんだ」

『違うもん！』

と、やおらデミは鼻溜を振る。

『ぼくは坊主じゃないもん！ デフ6は子供のうちは雌雄同体だけど、大人になった

らぼく、女の子になるんだもん！」

「……は？」

『でもね、一番の夢はおじいちゃんのを継ぐこと！』

さらに高らかと宣言して、デミはアルトへ満面の笑みを浮かべてみせた。
瞬間、アルトを底知れない疲れは襲う。

『……好きにしてくれ』

言うだけが精一杯だった。

『ならね、ならね……！』

試合に勝って勝負に負けたアルトの尻を、デミの絶え間ない質問が叩きに叩く。されるがままで、アルトはコクピットへ上がっていった。

「お、騒々しいな」

足音を聞きつけライオンも、その耳を立てる。

「こういうのは、けたたましいってんだよ」

言う間にも、デミは並ぶ計器へ向かい走り出していた。

『こら、勝手に触るなッ』

振り回されて追いかければ、その後ろからネオンは頭をのぞかせる。

「無事だったか」

見つけたライオンが、獣面をほころばせた。

「死にそうなほど振り回されたけれどね」

「船長が船長だから仕方あるまい」

「お前ら、放り出すぞ」

聞きつけ舞い戻ったアルトの脇には、デミが丸太と抱え込まれている。と、ライオンが、ふたりを前にやおら姿勢を正してみせた。

「わたしはパラシエントのルーケス・ク・ニット・タンペーナイマだ。しばし空間を共にするものとして、よろしく頼みたい」

「舌、かみそうな名前だな。ライオンでいいだろ、ライオンで」

くさすアルトの隣で、なら、とネオンも名乗ることにする。

「あたしはヒトのネオン。こっちはデフ6のデミ。よろしくね。でもヒト語、上手ね」
「ボイスメツセンジャーをやっている。ヒト語は得意配送言語のひとつだ」

『ねえ、造語で話してくれないと、ぼく、分からないよ』

アルトの脇から飛び出したデミが、誰もを見上げて鼻溜を振った。

「あんたの船、回収できるかどうか、フェイオンへ戻ってみるか？」

足元においてアルトはライオンへ目を細める。

「いや、もうこりごりだ。新しい船を買う。それだけの依頼料を同封の電子ウォレットで握らされた」

「それで……」

想像できた額にアルトは絶句した。顔へ、ライオンもうなずき返す。

「メッセージを握りつぶせなかった」

「ますます、とんでもない依頼人ってワケだな」

なら装っている必要のなくなったその顔を、ライオンはすり替え始める。

「ちなみに、普段の義顔はこれなのだが……」

浮かび上がった瞬間、場の空気は凍りついていた。見て取ったデミは泣き出し、ネオンも頬を引きつらせる。

「い、いや、先ほどの方がいいなら、それで通すが」

反応に、ライオンもうろたえた。

「そうしてくれ。船は狭いしな。そっちのほうが和む」
深くうなずき、アルトは促す。

ところがデミは泣き止まない。それどころかふらり、ネオンの前へ倒れ込んでいた。

「デミっ？」

慌てて抱きとめたネオンが驚き揺さぶる。だがデミが答える気配はなかった。やがて鼻溜からイビキのような音さえ鳴り始める。

「……まさかっ？」

気づき計器へ振り返ったのはアルトだ。目は、一酸化炭素のゲージを探していた。目盛はそこで危険濃度近くを指している。

「酸欠？」

即座に座席の下から酸素マスクを剥ぎ取っていた。言うネオンへ投げる。受け取ったネオンは、余るほどのそれをデミへ急ぎかぶせた。

「さっきの航行で事故ったか？ フィルターならヒト五人まで処理できるはずだったのに」

急ぎアルトはチェックにかかる。

と傍らで、手はすまなさげと挙げられていた。

「いや、申し訳ない。パラシエントはヒトの三倍の呼気量があつてだな……」

瞬間、殺気にも似た緊張がコクピットに走る。

振り返りざま、アルトは指をライオンへと突きつけていた。

「黙れ。しやべるな。息、吐くなッ」
つまるところメツセージの確認は、まだ先のこととなるらしい。